

年叢書第二編

191
159

特22-466

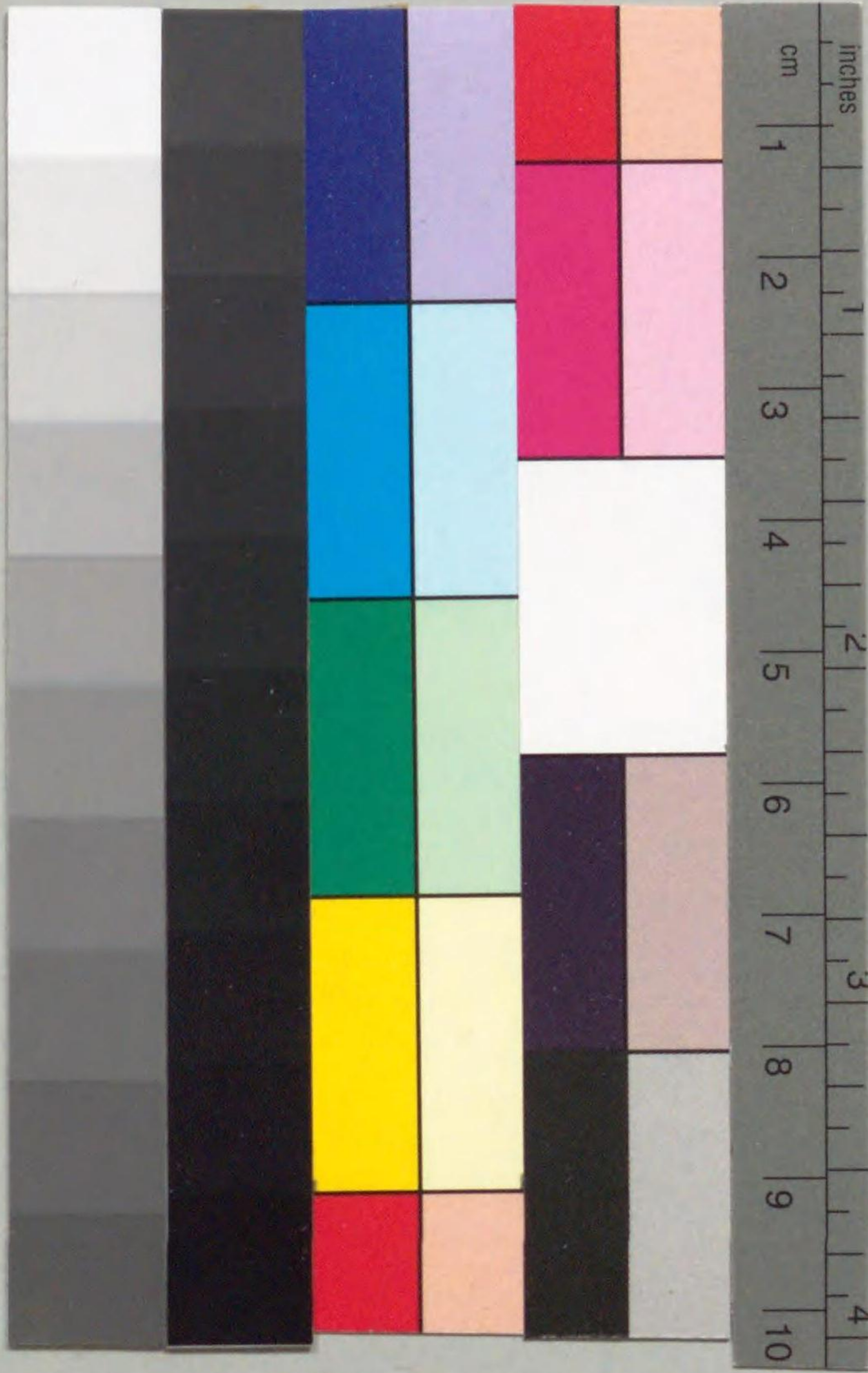


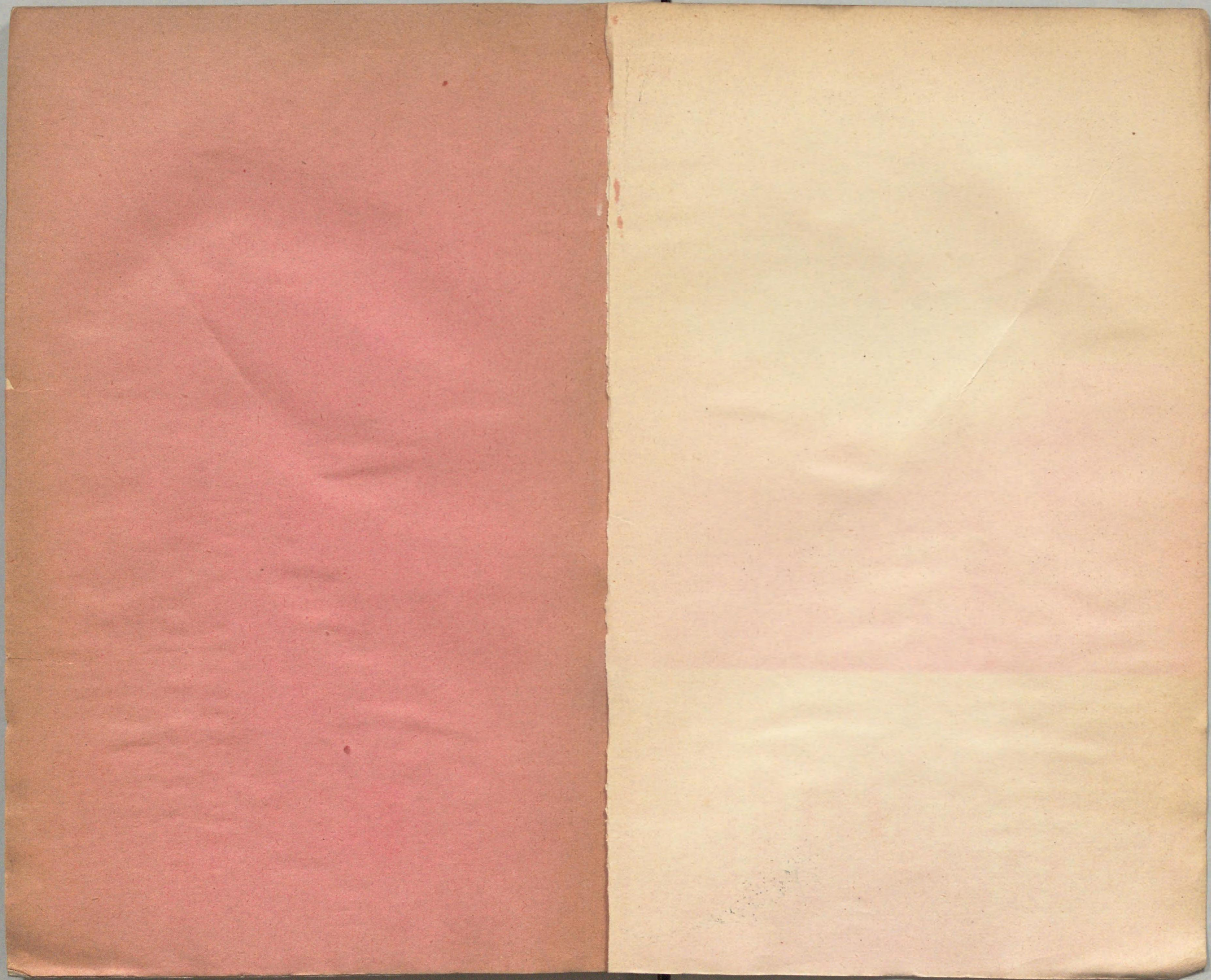
1200500797284

野口寧齋著

少年詩話

博文館藏版







梵心馬園看惘然為誰辛

苦自和憐 苦心似送楊枝

嫁與他人 亦少年

論文尊酒 每在却後忙



少年詩話目次

緒言……………一

詩とは何ぞや……………六

いかに詩を作るべきや……………一一

詩題はいかに……………一七

詩は作り難きものなるか……………二三

漢詩といへるに就きて……………二八

韻と平仄と……………三三

平仄の變遷……………三九

孤平……………四二

五絶の平仄(上)……………四五

五絶の平仄(中)……………五〇

青樓種句時刻地盡
吹夢過河同話外少年詩

槐南本林大才漫題

碧石堂田遠華生

續少年詩話

五絶の平仄(下)……………五三

七言絶句の平仄(上)……………五六

七言絶句の平仄(下)……………五九

五言律の平仄……………六三

五言長律の平仄……………六七

七言律詩の平仄……………七一

拗躰……………七四

詩の變遷(一)……………七七

詩の變遷(二)……………八〇

詩の變遷(三)……………八四

詩の變遷(四)……………八九

詩の變遷(五)……………九四

附 錄

詩の變遷(六)……………一〇一

詩の變遷(七)……………一〇六

詩の變遷(八)……………一一三

詩の變遷(九)……………一二一

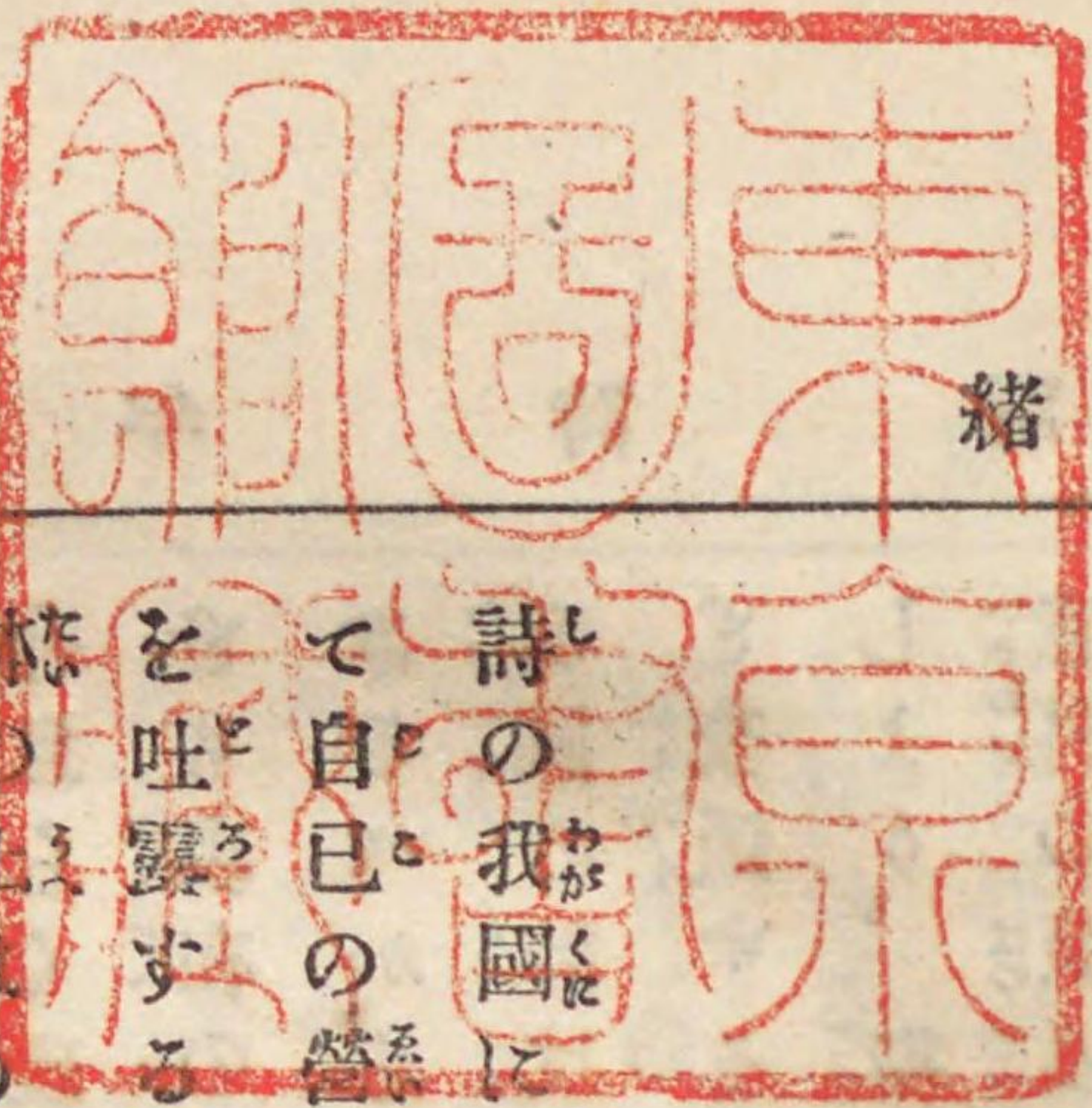
詩の變遷(十)……………一二八

詩人の徳義……………一三六

少年詩話目次終

少年詩話

野口寧齋著



緒言

詩の我國に行はるるや久し、我國人の詩に於けるは能く之を消化して自己の營養に供するが故に、文字は支那に借ながら、己が思想を吐露するに十分なるとは、我國語を以て歌ふに異ならず、故に國體の上よりして之を論ずれば、國語を以て己が志を歌ふべきとは人々に異論有るべき筈無けれども、詩が己に我國の詩と化成したる今日に在りては、之を發達せしめて支那をも壓倒せんと亦快哉の事にあらずや。聞く所によれば、佛教大乘の奧義は印度にも在らず、支那にも在らずして我國に存せりといふ、教は其發生の地をも凌て、

天晴と仰がれ居るに、詩は獨り其本家本元に駕して上るを得ずといふ道理なれば、他年に至りて支那人をして詩を學ばんと欲せば、宜しく日本に赴くべしと言しむるもの有らんと、たゞ少年諸子の旗を勉むるに在るのみ。

今且らく現在なる詩壇の有様を説きて諸子の參考に供すべし。然れども現在の状態を説んとするには、先づ我國從來の状態をば概説せざるべからず、煩らはしけれ是が順序なりと知りたまへよ。

我國の詩は弘仁天皇に創まると言ひ傳へたり、それよりして後、唐と交通すると逾よ繁くして、彼の文物は何くれと無く取り用ゐたりしより、斯道にも堪能なる人少からず、あはれ此儘に進み行かば、意外の發達を爲すべしと思はれたりしも、幾程も無く世は兵馬の塵にまみれて、中々に筆おつ取て支那文字を並ぶる暇無ければ、詩は何日の間にかそたれて、僅かに墨染の袖着たる僧侶に頼りて、一綫

の命脈を保ちたるのみなりしが、徳川氏起りて太平の風漸くに吹き渡りしより、詩は一般の學術と諸共に復興せられ、其間には明詩の風を學ぶも有り、宋詩の神を傳ゆるも有り、我こそは漢魏六朝と旗を樹つるもあれば、唐人の正統は斯く申す某と名乗を揚るもあり、諸躰全く具はるが如き有様なりしも、維新の後は舊物打壞の呼聲のみ高く、素人考へにては、支那文字などは何と無く時代後れの如く見へたるより、今までは平仄をひねくりたる者も多きは中絶せるととなり、篤志の人にあらざれば新たに學ぶ者も無かりしなり。然るに反動の潮流一たび捲き起りて八九年來は又更に芽を出し、此度は別に甚しき障礙も無くして、日一日と進み行くことなれり。されど此度は四面皆新空氣を以て充たされたる社會に出でたるが故に、從來の詩を學ぶものとは稍や其方向を異にする者有るやに見受らる、是現在詩壇の状態なり。

其方向を異にすといふものは、何事なるやといふに、從來は専ら詩を作るを主としたるに、今は詩を究むるとも、其一部分を占むるととなれるなり、更に之を言へば、詩才に加ふるに、詩識詩學を以てせんとせざるなり。抑も古人は歴史を作るには、三長を要すといへり。三長とは才と學と識とに勝れたるをいふものなるが、詩に於ても亦此三者を兼ねざるべからざるは、我言を待ざる處なり。されど從來は比較的才を鍊るを專一として、上手なり名人なりと言はるゝのみをば名譽なりとなし、詩に關するの識見、詩に關するの學問は、百中の一二に於て之を認むるのみあるに過ぎりき、是或は研究すべき書籍の乏しかりしにも因るべく、或は詩を以て遊戯なりとして、自ら賤しみたるにも因るべし。幸にも維新以後は支那との交通も頻繁となれるが上に、舶載の書籍も多くして、從來は一家の秘藏たりし者も今は人々所藏の有振れたるものとなるなき、研究の

材料は十分なるが上に、詩をば審美の學よりして批判するものさへも出來り、一面には支那語を學ぶ人多くなりて、音韻に發明する所有り、一面には支那人に接して、意外なる處に聲律の議論有るをも知る有り、從て究めて然る後に一家を爲さんとせる者、其人に乏からざる事となり、假令ひ未だ一般に詩學詩識を注入するには至らざるも、方向は方に從來と異なるもの有るとは斷じて之を言ふとを得べし、思ふに識にして長じ學にして深からんには、才は從て大とあるが故に、一步一步進みて行く中には、彼萎靡して振はざる支那をして、我國の詩軍に降らしむると、あながち空想のみにはあらざるべし、是や時勢の然らしむる所なりと雖も、其功は亦現在なる先輩諸氏が、勵精して斯道の爲に盡されたるに歸せざるべからず、少年諸子は已が責任の大なるを知ると共に、先輩諸氏に向て其勞を謝する所無かるべからざるなり。

詩とは何ぞや

詩は志なりとは昔より言ひ傳えたるものなるが、其理は千古に不磨なりといふべし、但し此處に志といへるは、已が志す所と云るが如き狭き意味に解すべきものにはあらで、直ちに感情の動く所を指して言ひたるなり、されば又詩は心聲なりとも言へり、心は固より形無きものなれども、感情の動く所に就きて之を索むれば、輒すく其真相を認むるを得べきが爲に、洒落て心聲とは名けたるなり。

宋の朱熹が詩經集傳の序に云く、人の生ながらにして靜なるは天の性あり、物に感じて動くは性の欲なり、夫れ既に欲有れば思無きと能はず、既に思有れば言の盡す能はざる所にして、咨嗟咏嘆の餘に發するもの、必ず自然の音響節奏有りて已むと能はず、此れ詩の作る所以なり、

説き得て好し、感情の動くや、外物の刺撃による有り、内部の興奮による有り、何でも無き事にも嬉しく、何でも無き事にも悲しく、理を以て之を羈縛すべからざるもの、即ち言の以て之を盡す能はざる所なり、今之を稱して性の欲と爲すは、一寸之を見て、語弊なきに非ざるが如きも、亦全く理窟以外の感情を指したるものなるのみ、しかも其或は喜び、或は怒り、或は哀み、或は樂むに當りては、喜怒に喜怒の調子有りて言語にあらはれ、哀樂に哀樂の音節有りて文字にあらはる、其調子なるものと音節なるものとは、全く感情の結果に成りたるものにして、作者も自ら之を知らざるもの有り、而して詩は其自然なる音節と調子によりて、森羅萬象を包含するに至れるなり。

余は和歌を識れるものにあらす、又歐人の所謂ポエツトなるものを識れるものにあらす、されど其由て來る所を尋ねれば、いづれも異

あるもの無るべし、紀貫之が古今和歌集の序に
大和歌は人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける。世の中
に在る人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを見るもの聞
くものにつけて言ひ出せるなり、花に啼く鶯、水に棲む蛙の聲を
聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける、
と言ひたるは、東も西も見所同じきを見るべく、しかも貫之が
優にやさしきと、熹が四角張りて講釋したるとは、偶々以て其本色
を代表したるとも見るべきならんか、歐人が審美の學に於て精細に
詩を説けるものは、余は之を明かに知るとを得ざれども、情を外に
して其作る所以を説かんとは、天に梯をよるよりも難きが故に、其所
説の揆を一にすべきものなると、固より保證し得べきなり。
此の如くにして、詩は咨嗟咏嘆の餘に發するものにて、全く感情に
屬したる者とすれば、其全く智識に屬するの科學、若くは全く意志

に屬するの道德とは、必ずしも其蹊徑を同くすべきものにあらず、
されば毆たれて痛きをば痛しと咏する者は詩なれども、其かくく
なるが故に痛しと其理を究むるは、必ずしも其主とする所に非ざる
なり、殺して慘きを慘しと咏するは詩なれども、少を介して多を救
ふは善なりと其事を正すは、必ずしも其主とする所に非ざるなり。
然れども、智識と意志を以て全く詩以外に立たしめよといふにあら
ず、學術を以て識力を養ひ、道德を以て見地を進むるは、詩人に欠
くべからざるの要素なるは言を待たず、今はたゞ其性質を分ちて感
情の必ずしも智識と意志とに準據せざるべきを説くなり。
されば詩は其初天真爛熳にして無邪氣なる者も、亦之を爲すとを得
べきが故に、其進歩の有様も亦他の學術と異なる者有り、假令其
感情の何如は他の進歩に伴ふて、今古其差違を生ずることあるも、
事に觸れ物に應じて興奮せるものなれば、千歳の上、千歳の下、共

に活氣有るを覺ゆべし、古きが故に陳套なりとせんか、八雲たつ
の 脈は今に諷誦せらるべき筈なく、擊壤康衢の歌はいつまでも流傳せ
らるべき筈なく、ホーマアの詩は早く已に抹殺せられたるべき筈な
り、之を昨日は正と思へるものも今日は之を誤となし、今日は之を
真と思へるものも明日は之を偽と爲すの學術社會に較ぶれば、固よ
り一例視すべからざるを知るべし。
獨り其古には古感情の面白味有り、今には今感情の面白味有ると、
學術社會の日々に新なるものと異なるのみならず、咨嗟咏嘆に關する
ものは、研究琢磨に關するものに比せれば、其起原必ず舊し、蓋し
人は有情の動物なり、花を看ては美しと思ひ、月に對して清しと思
ひ、勇士を猛しと思ひ、佳人を麗はしと思ふは、昔も今もかはらぬ
人情なるが故に、喜怒哀樂の至誠より發する者は、蒙昧の世に在り
ても、尙ほ能く聞く者をして感動せしむるもの有るなり、花に啼く

鶯、水に棲む蛙すらも、自然の音調節奏有るを知らば、詩の早く起
るに性むを要せざるべきなり。
詩は真に心の聲にして其志を述ぶるものなり、然らば即ち如何なる
者をば其上乗と爲すべきかと問はば、余は之に答ふるに躊躇する事
無し、曰く、景物を描きては讀む者をして眼前に彷彿せしむべく、
情思を抒べては讀む者をして全く同情を投せしむべし、此の如くな
れば詩の能事は畢るなりと。

いかに詩を作るべきや

天地の間に一の同きもの無しとは哲學者の唱道する所なるが、そを
何如なる故ぞといふに、何如程巧に相似たらん者も、精密に調査す
る時は、一點の相違無しといふを得ず、假りに性質も形骸も毫末
の差無きと、同じ機械にて刷り上げたる印刷物の如しとあすも、其

一葉一葉は世に出るの時間に先後有り、世に在るの場處に左右有り、
 迎も同じ物とは言ふべからずとはいふなり。
 斯まで精密に理窟を捜るは、宇宙の理法を研究する學者に在りて誠
 に道理至極なれども、普通に於ては形骸性質の略は相同き者をば、
 且らく認て同となして足れりとせん、然れども、普通同一事物に在
 りても、時間と場處の差異によりては、我の之に對する感情常に異
 なりて、殆ど又天地に同きもの無きを信せしむるもの有りとす。
 例へば日蝕の如き、科學の未だ發達せざる時に在りては、種々の感
 情を以て之を迎へたり。漢の孔光は
 上天は聰明なり、苟も其事無ければ變は虚しく生せず、
 と言へり、此の如くに解釋して、日蝕をば人君に過失有るの象とな
 す時は、人君たる者は其度毎に惴々焉として恐こみ惶こまねばなら
 ぬ事となるべし、宋の梅聖俞は

老鴉居處已自穩。三足鼎峙何乖慵。而今有背不能噪。而今有爪不
 能攻。任看怪物翳天眼。方且省事保爾躬。日月與物固無惡。應由
 此鳥招禍凶。吾意彷彿料此鳥。定亦閃避離日宮。
 といへり、言ふは、日は本と三足の金鳥が之に棲たるものとなし居
 たるに、今忽ち暗黒となりしを見れば、何か他に怪物有りて之を翳
 ひたるに相違無く、鳥は夫が爲に啼くとも争うとも出來ざるに至る
 なるべし、思ふに鳥に禍を來すべき事有りて、鳥も今は餘義無く、
 暫時の間日宮を退きたるものならん、日は萬代不變にして過失有る
 べき筈無ければ、悪きは鳥の業なりとなせるなり、此く言ふは日に
 象れる人君に過失無くして、之に代りて政を司とれる大臣に罪有る
 ものなるが故に、大臣は天の變に鑑みて其躬を正しくせよと勸めし
 なり、されど今日に至りて之を考ふれば、日蝕は太陽系統の各々が
 運動するによりて、月球時有りて地球と日球との中央に位して、爲

に日球を掩蔽せるものあると、少年諸子が風に之を知る所なり、然らば則ち今日に在りて日蝕の詩を作らんには、孔光流に人君の過によれりとは言ふべからず、又梅聖俞風に鳥が禍を招くとも言ふべからず、別に其新知識を以て巧に其眞理由を述べざる可らず、是に於て同一日蝕なれども、時代に因りて、感情を變化せしむると有るに至れりといふべし。

牡丹は花の富貴なるものなり、支那に在りては之を花中の王として萬口に異辭無く、

既全國色與天香。底用家人紫共黃。却喜騷人稱第一。至今喚作百花香。

といふが如き、贊揚は一にして足らず、しかも邦人は櫻を以て花の中なる花となすが故に、牡丹は斥けて之を眼中に置かず、

西士牡丹徒自誇。不知東海有名葩。徐生當日求仙處。看做祥雲是

此花。

と稱するが如き、亦人々の心以て然りと爲す、されば同一牡丹にして、彼に在ると此に在るとは感情大に異なること、是猶は泰西人が黄金の髪をば美とたへ、南洋人が低き鼻をば麗と譽むるが如く、場處によりての差違なりと知らる。

場處と時代とに因りて、感情の變化する事は此の如くなれども、亦或は同時同處に在りてすらも、境遇の異なるによりて、感情亦同じからざる者有り。例へば同一の鵲聲も、客土に在りて郷を懐ふものは、不如歸々々々と聞き分けて、「一叫一回腸一斷」と悲なるべく、

雅人か今かくと青葉隱の月下に耳側つる折には、「いつも初音の心地こそすれ」と喜ぶなるべし、是亦盜者が餽を見る時は、戸を開くに音せぬやう爲さんとを思ひ、孝子が餽を見る時は、親に勧めて旨を味しめんを思ふに齊しく、我心の赴く所によりていづれども感

ずるに至れるなり。
感情已に時代と場處とに於て相違有り、又其境遇に於て相違有りとすれば、人の詩を作るは又其感情の異なるだけに各差異あらざるを得ず、或は上よりし下よりし、或は前よりし後よりし、詩境は廣きが故に、其感ずる儘に筆を走らして文字に發するもの、是即ち其眞性情なり、性情にして眞あらば、題目は陳套あるも、作者は常に儼然として文字の裏面に存在し、長く傳はるに愧ざるへし、是感情は常に同からざるが故に、詩も亦同一圈套に陥らざるを以てなり、若し悲哀ならざる者も古人に摸して悲しとなし、歡娛ならざる者も前者に倣ふて娛しとなさば、是古人の性情を述ぶるものにして、自己の性情を具へざるものなりとす、故に我はいかに詩を作るべきやと問もの有らば、たゞ眞性情を述よと言ふの外なしと信するなり。試に思へ、碁を圍む者は古來其幾億萬回なるを測べからざるなり、

しかも千變萬化して一も同局を打ち出さざるは、是全く圍碁者が機に臨み變に應じて籌を運するが爲なり、若し徹頭徹尾碁經碁譜と首ッ引して子を下さば、一面を打ら盡すも、是尙ほ古人の碁にして其人の碁にあらざるべし、詩を學ぶ者、冀くは之を悟れよ。

詩題はいかに

天の覆ふ所、地の載する所、森羅萬象、見るとして聞くとして詩ならざるは無し、詩人各其感ずる所に就きて歌ひ、或は他の一事をもて詩にならずと爲し、他の一物をもて逆も詩題にあらずと爲すが如きは、其何の故たるを知らざるなり。
一の隱士有り、其題目とする所は江山風月なり、田園桑麻あり、閑適自然にして獨り相樂むの語を作し、一生を終りたりとなさんに、こは其境遇が之をして風雲月露たらしめ、之をして田園桑麻たらし

めたるのみ、一の通人有り、其題目とする所は應酬唱和なり、樓臺宴集なり、風流洒脱にして歌呼自ら歡ふの語を作し、一生を終りたりとなさんには、こは又其境遇が之をして應酬唱和たらしめ、之をして樓臺宴集たらしめたるのみ、詩境よりして之を見れば、二者は共に其一局部を認めて其題目としたるまでにて、隠士は且らく他に題目有るを忘れ、通人も且らく他に題目有るを忘れたるなり、是其境遇の致す所たるに外ならず。

故に此二者は相反すると正しく背を合するが如きも、境遇にして一轉せば、通人たりしものにして隠士の語を爲し、隠士たりしものにして通人の語を爲すと、蓋し亦容易なりとす、思うに人其心に考ふる有れば、耳目の觸るゝ處、皆な其心のまに、聞見せらるゝが故に、其言ふ所は自ら同じからず、言ふ所同じからざるが故に、題目を採擇すると亦復た同じからず、故に閑適なる者を好みて、詩題は

閑適なるを可とすといふもの非なり、風流なる者を好みて、詩題は風流なるを可とすといふもの亦非なり、詩境の廣大あるは、詩人が之を採りて吟哦するに於て、いづれとして題目に不可なるもの無きなり。

之を大にしては國家の事變坤輿の變遷より、之を小にしては日間の瑣事蟲魚の纖細に至るまで、取て之を詩にするに不可は無けれど、此の如く遍滿せる題目を賦し出すに當りて、諸子が最も注意せざる可からざるもの有り、余は之を名けて陳を化して鮮と爲すの心得と云ふ。

元來詩題の遍滿せること此の如くなれば、我が得て之を詩にすると容易なると同時に、古人も亦得て之を詩にすると容易ならざるべからず、古人已に取て之を詩にするとの容易なれば、我が取て之を詩にせんと欲するものも、早く既に古人の爲に言ひ盡されたる

如き場合をも生ずべし、勿論古人と我と徹頭徹尾に同一境遇なるとは得られざるも、其略は相似たる場合に於て、古人と同一の趣向を浮ぶると無しとも限らず、此時にして古人と同一の趣向を其儘に作り出さば、其詩は古人の模倣にて其人の詩は無けん、詩無ければ固より題目無しとも言得べし、是に於て古人以外に一頭地を出さんと欲せば、勢ひ此陳を化して鮮と爲すの心得無るべからず、陳は陳腐の陳にして鮮は鮮新の鮮なり、故に細かに煎じ詰れば、温故知新とは似たり寄たりの中と知るべし。
例へば山を咏せんに、古人の之を高しと言ひたらんは、我之を幽なりといふも可ならん、古人の之を白雲に聳ゆと言ひたらんは、我之を蒼穹を衝かんとすといふも可ならん、雷は中腹に鳴るといへば、霞は絶頂に棚引くとも言ふべし、深樹の鬱葱たるをいへば、飛泉の鞞鞞たるをも言ふべし、旭の上る時こそ一汐と言はゞ、月の入る時

こそ一段とも言ふべけれ、神人の居ませるこそ尊とけれと言はゞ、仙禽の飛かふこそめでたけれとも言べけれ、右よりし左よりし、表よりし裏よりし、言ふべき節の少なからぬは、陳を化して鮮と爲すもの、注意すべき所なり、畢竟するに山の眞をば寫し出すが目的なれば、古人の言はぬ點より觀察して雷同を避くること、固より其超然として高き所以なり。
而して陳を化して鮮と爲すの心得にして、諸子の手の中の物とならば、萬事萬物、皆よく我詩題として絶妙好辭を作すに足らんか、余は此に尙ほ一條の秘訣を要すと思へり、名けて俗を化して雅と爲すの心得と云ふ。
いかに其詩は陳套ならざるにせよ、其着想にして卑淺なるか、其文字にして俚俗ならんには、識者の口に上らんと難かるべし、そは此に一一其例を擧ぐるまでも無く、詩の物たるや卑淺俚俗なるべから

さればなり。
獨り着想の卑淺にして文字の俚俗ならぬやうに注意すべきのみならず、尋常一様に見て以て卑しと爲すものをも、巧に其中より雅趣を看破し來らんとをば期せざる可らず。
乞巧は人の以て賤と爲し穢と爲す所のものなり、されど陶淵明は之が爲に

感子漂母惠。愧我非韓才。銜戢知何謝。冥報以相貽。

と歌へり、こは乞食を以て韓信が漂母の爲に一飯を恵まれたるに比し、其語を借りて君の惠を受たれども韓信の才有らねば酬いるに由無し、されど君の志は永く我肝に銘し置きたれば、來世に於てこそ御恩がへしを致すべけれといふなり、其溫柔敦厚の思、何の處に賤と見るべきもの有るや穢と見るべきもの有るや、彼「梅が香や乞食の家も覗かる」といひしが如き、亦其思想の超出せる俳句たる

を見るべきにあらすや。

田家の夫妻が赤裸々にして盤臺に踞坐し、澁團扇に蚊を追ひながら濁酒を斟む、以て卑しとなさば爲すべし、しかも之を歌ふて「樂は夕顔棚の下涼男はてゝら女は二布して」と稱するときは、團樂の情味眞に掬すべきもの有るを覺ゆるべし、俗を化して雅と爲すとは唯此一點に在り、俗事をも雅用するを得ば、雅事の雅用せらるゝは、固より言を待たざる所なるべく、それ然る後に詩題は滾々として盡さず、天地に遍滿して絶妙好詞を待ち受るが如きに至らんなり。

詩は作り難きものなるか

詩は作り易きものなるか、將た又作り難きものなるか、作りて巧なり易きものなるか、將た又巧なり難きものなるか。
昔人は詩と文とを比較して、此は將碁の如く彼は碁の如しと言へり、

其故は何如に。

碁には三百六十子の區別有れど、四ツ目殺さへ知りたらんには、不完全ながらも盤に對して石を下し得べし、是入り易きなり、されど其虚となり、實となり、死せるは生き、離なれたるは合し、幻化の端無きに至りては、一子たりとも苟くもすべからず、是巧なり難きなり、文章も亦此の如し、字を組織すれば則ち文の形をなす故に、見て甚だ容易なるが如きも、其波瀾頓挫 起伏照應などの法則は更なり、學もいれば才もいり識もいる譯にて、僅に一片の電信文、一葉の端書文にても、巧拙分明なる有様なれば、其入り易き割合に巧かり難きと、碁と同一例なりと知らる。

將碁は之に反して入ると甚だ難し、そは一駒々々にそれく運動の方向を異にするが故なり、飛車の縦横に奔馳する、角將の斜邊に飛揚する、桂馬の高飛する、香車の直進するなど、素人には香込に面

倒にて、何にも知ぬ者にて、矢鱈に碁を並べ立るとを得るとは、逆も比較にならぬやうなり、されど一度規則を手に入たる後は、いかに變化多しとするも僅々四十駒の勝負なるが故に、局面の狭きだけに巧になると容易なるべし、詩も亦た然り、之れを學ばんとするには文と違うて種々の規則有りて、或は韻字と云ひ、或は平仄と言ひ、支那字の數は億萬にて數え盡されぬをば、我詩の爲に韻とし平仄となして用ゐるとは、想像にも及ぬ話なり、されば初學は之に對して茫然自ら失せざるもの幾何も無からん、されど少く學べば何時とはなしに平仄をも香込み、殊には其感情を述ぶる者なるが故に、文に比して學力を要せぬが如く見え、字數少くしてしかも句に一定有れば、兎に角たゝき上るに便利なるが如く見え、六かしと思へる對語も今は却て之を借りて、趣向を設け得るが如く見え、入り難きもの却て巧なり易く、亦將碁と異なる無し。

右の説は一般に傳稱せられ、中にも文章家には最も都合好き口實を
與へたるものなり、成るほど詩には音韻有り、平仄有り、之に加ふ
るに五字或は七字を以て調子を取るものなるか故に、之に入る時の
艱苦は文の比にあらざれども、少く覺えこむに至れば、其艱苦と思
ひし規則より雅味を導き、作者をして自然に浮れ出さしむるのみな
らず、概して其字數の少きものなるが故に、文よりは樂に之を作る
とを得て、何の雜作もなきに至るは瞬くうちなり、余は此點に於て
は古人の説に一致す。

されどそは作り易しとの事なり、作り易しと巧あり易しとは同一に
あらず、其道に入りて見れば、何事も見かけ程に容易なる者にあら
ず、詩は感情を述ぶるものなるにせよ、此感情なる者の、諸般の事
に觸れて詩に入るや、只簡單なるもの、みには止まらずして、或は
智識をも包み、或は意志をも含むもの有りて、一事一物、なげやり

に投げ出すべきものに有らず、されば豫てより腹中の書等をば用意
して、いざといふ場合の資に供せざるべからず、杜少陵は爲に「讀
書破萬卷、下筆如有神」といへり、而して才を以て之を運し、識を
以て之を判すると、何ぞ文と違はん、章法篇法句法字法も亦文と些
の異なければ、詩のみ巧なり易しとは言ふべからざる道理なり。
更に之を考るに、人智は日に進むものなれば、今日の我は昨日の我
を鈍しと思ふなるべく、明日の我は今日の我を拙しと思ふなるべし、
我自ら前日巧ありと思へる者をば、拙なしと悟る時は、我目の肥た
る時にて、腕も之に従て一階を上るものなり、かくて一級々々段
々に上りつむれば、名家とも大家ともなる事を得べし、是文と一向
の相違無く、別に巧なり易き理窟なきに似たり。
余は以爲らく、詩を以て文に比すれば、入り難けれども作り易し、
作り易けれども其巧なり難きは一なり、只何時とは無しに進歩し行

くのみと、例へば書は入り易くして巧なり難し、書は入り難けれど
も巧なり易しと言は、畫家たるもの、恐くは黠頭して善しと言は
ざるべきにも似たらんか。

漢詩といへるに就きて

詩は詩なり。太古に於て嗟咏嘆せるものより、五言七言の規律整
然たる今日に至るまで、別に何等の冠詞を要せざるなり、さるに此
頃に至りて、漢詩といへる名目出で來りて、いつとは無しに文壇に
普遍するに至れり。

詩は詩なり、特に之を漢詩と名くるものは、何物に對して之を別ち
たるものなるや、我邦には自から歌有り、或は詩を名けて唐歌と稱
するに因み、歌をば大和歌と言もの有と雖、要するに歌は歌なり、
強て之を國詩と稱し、詩を以て漢詩と名るが如き、まはり遠き名稱

なかりしや當然なりといふべし。

泰西の文字を研駁するもの、其所謂ポエツトなるものを見、譯して
之を洋詩といひ、遂に之に對して漢詩の語を創む、然れども、ポエ
ツトの形狀性質の相類するによりて、之を洋詩と名けたればとて、
支那文字の詩はいつも詩として其名前の本家たるを失はず、例へば
英人にして詩を譯して支那ポエツトといふものあらんに、それが爲
に態々自國の文學に冠するに英ポエツトと言はずとも、萬々差支無
かるべしと思はるゝに非ずや。

或人はいへり、文に漢文有り、詩に漢詩有るも亦妨なかるべしと、
されど是も誤れり、文に漢文の名有りしは、我邦に和文有るが爲に
之を分てるなり、同じ名目有りたればこそ和文漢文と相對峙したる
なれ、我に歌有り、彼に詩有り、各其別つ所によりて一目瞭然たる
もの有るに、殊更に漢字の蛇足を加ふるは、是固より何等の必要を

見ざるなり。
抑々名は實の實なり、諸子よ、余が何故に此の如く嘔々するかを訝
ると莫れ、聊か説有り、諸子よ、僻に失すと爲すが如き感情を去り
て、余が述ぶる所を聞けよ。

漢は固と支那歴代中の一國なり、支那を稱するに唐を以てし明を以
てするが如く、單に其時代によりて命名するが如きものあらしめん
には、尙ほ可なり、されど今の所謂漢なるものには、更に一の意味
を具有せることをば知らざるべからず、そを何事ぞといふに、漢と

は夷狄が支那を稱するの語なる是なり。
稗海全書に據るに、今の四夷が中國を謂て漢と爲すものは、匈奴人
が曾て中國人を謂て秦人と爲せると同じく、古くよりの言ひならば
しにて之に至れるものなりといへり、思ふに其最初に在りては、老
人が東京と言ずして江戸と言ふが如き有様にて、口々に相傳たるも

のなりしならん、しかも相授け相受るの久しき、支那内地の人亦自
ら漢人を以て居り、漢といふ字は、いつとはなしに歴代名稱の外、
更に四夷に對する支那の異名とあり、從て一種尊重の意を帶ぶると
となり、胡漢といひ、蕃漢といふが如き熟語も亦生ずるに至れり、
「蕃漢列旌旗」といひ、「蕃漢斷消息」といひ、又或は「胡兒角吹漢兒曲」
漢人骨築胡人壘」といふが如き、皆純然たる中華の義を以て漢字に
含有せしめたるなり、今日に在りて、滿洲は清祖勃興の地なるにも
係はらず、尙ほ滿人漢人と稱へて相同じくせず、其狀は内地人のア
イノに於けるが如く、暗に之を侮るもの有るは、亦た漢の一字有
るに因らずんばならず。

池北偶談には謂く、元の時、契丹、高麗、女直、竹因歹、竹亦歹、
朮里洞、歹竹温、渤海、八種の人を以て漢人となし、中國人を以て、
南人と爲すと、管曝雜記には謂く、元の初に遼金を取れるや、遼金

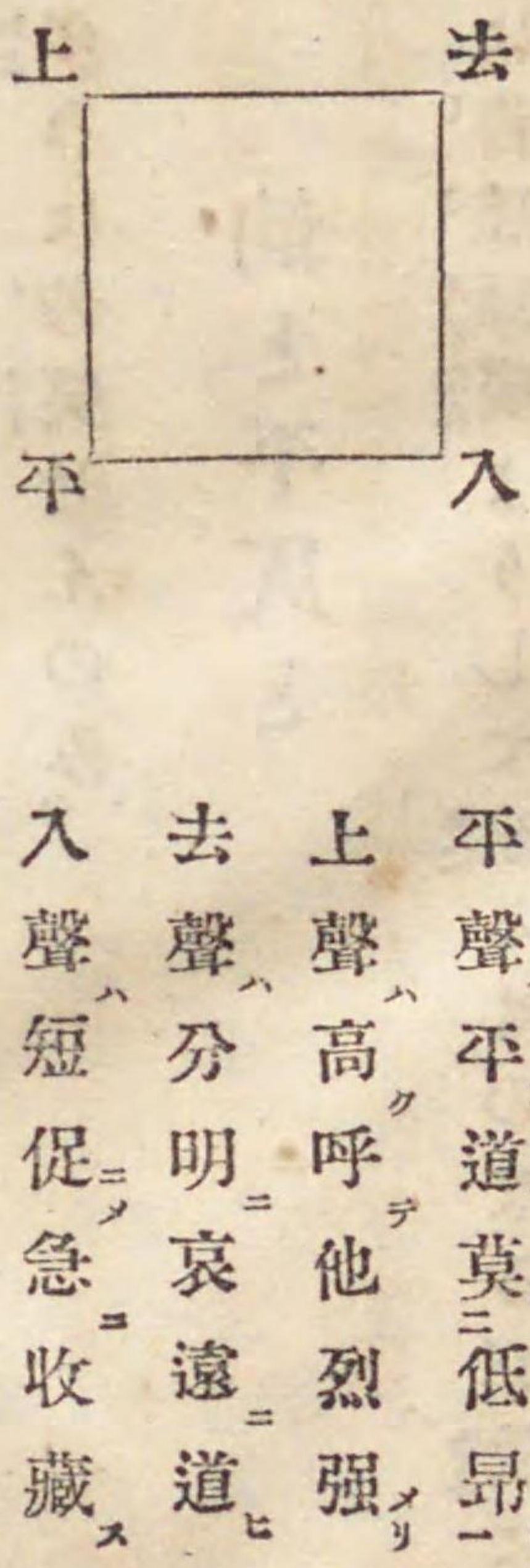
人を以て漢人と爲し、繼で南宋を取れるや、南宋人を以て南人と爲すと、兩者各異有りど雖、元が北方胡羯の間に起れるが故に、其漢といへる名前をば、故さらに北方に私し、以て自ら居りて人に裕らんと爲せるに過ぎず、亦以て漢字の如何なるものなるやを知るに足らんか。
已に漢字にして此の如きの意味を有すとせば、從來倭魂漢才と稱して自ら傷つけ居たるもの、今にして之を思へば長大息すべし、豈獨り物茂卿が甘じて東夷と書したるを咎むるのみならんや。
漢か漢か、夷狄の支那を稱するものなりとせば、邦人にして之を口にするは、死するも之を差づるなるべし、所謂漢語漢字漢文學の如き、亦當さに之を改めて支那語とし支那學となすべし、而るを况んや詩に無用の贅疣を冠らしむるに於てをや、余が少年諸子が漢詩の名目を稱へざらんことを望むもの、豈他意あらんや。

因にいふ、近人の新を好むや、一般の文學者を以て詩人と稱し、詩を廣義に解すれば小説戯曲何々何々までも皆詩なりといひ、甚しきに至りては、形式性質ともに歌の一昧ともいふべきものまでをも、名けて新詩といふ、詩といへる名目のそれ程調寶にせらるゝは結構至極なれども、詩にして靈有らば、或は又其累せらるゝと多きに苦笑せんのみ。

韻と平仄と

詩は已に咨嗟咏嘆よりして來るものなるが故に、其文章と異なりて特殊なりと見るべきは、文字の音節を借りて其情思を發揮せしむるに在り、されば音節の抑揚は人類自然の結果にして、是ならでは情思を發揮するに適するもの無により、從て其音節の同じきを集め、異なるを分ちて、韻なるもの此に生ず、韻は音節によりて文字を

類別せるものなり。
韻は已に定まりて、更に其音の清き濁れるにつき、昂き低につき、
又特に其同じきを集め、其異なるを分ちて、平聲上聲去聲入聲の
四と爲し、名けて四聲といふ、四聲を分つの法に曰く、



平聲は平夷にして流暢なるものにて、上聲は適上にして激揚なるものなり。
去聲は悽怨悠遠なるものにて、入聲は急促切迫なるものなり。
而かも字音已に此の如くなるが故に、其發揮する所の情思も亦各異なれり、
例へば平聲は情思の平夷なるに宜しく、上聲は情思の激揚なるに宜しく、
去聲は悽怨なるに入聲は急促なるに宜し、而し

て上去入の三聲は、之を平聲に對して音節の變調といふべきものなるが爲に、
三者を總稱して仄聲といひ、以て平聲に配す、平仄といふものは是なり。
四聲の目は梁の沈約に創まる、上古に在りては固より咨嗟咏嘆の有のみなるが故に、
調子は勝手氣儘なれども、其中に自然の節奏有りて、語尾の字韻を齊しくせしめたるは、
調子の重位を占めたるなり。

漸く進みて音節をば定めんとする傾を生じ、從來は混用せるものをも精撰して、
一定の分類を立てんことを謀り、約は斯學の開山と稱せらるゝに至れるなり、
或は又四聲の別は古よりして自ら之有りとし稱すと雖も、約が之を大成せるや異論なきなり、
明の太祖は謂へらく、韻學は江左に起ると、江左は六朝時代を指したるものにて、
約は實に此時代の一人なり。

されど太祖は江左に起れるの韻學を以て中原の正音に非ずとなし。宋濂、樂韶鳳、王僊、趙燠などの學者を集めて、新たに四聲を別たしめ、六たひ稿を易えて漸く成り、名けて洪武正韻といへり、魏瑞之を評して云く、其大要は韻の分てるものは之を合せ、合せるものは之を分ち、其固執せるものは之を通じ、混同せるものは之を別たり、蓋し唐宋より以來更に能く及ぶもの無しと、祥瑞は明の遺臣を以て自ら居るものなれば、其勅撰の書を尊重せるは、學問以外の傾なきに非ざれども、兎に角其推稱せるや至れり、されど通常は仍は依然として、祥瑞が嘲りて南蠻鵠舌の音と爲す所の約を祖述して、其分類は今に至りて行る。

畢竟するに韻學は一種専門の學に屬するが故に、余は此に之を詳説すると能はず、たゞ今古賦の平仄を述ぶるに先ちて簡に之を示すのみ、而して其區分する所は實に左の如し。

上平聲		下平聲	
一東	二冬	一先	二蕭
六魚	七虞	六麻	七陽
十一真	十二文	十一尤	十二侵
三江	四支	三肴	四豪
八齊	九佳	八庚	九青
十三元	十四寒	十三覃	十四鹽
五微	十灰	十五刪	十五咸
上聲		下聲	
一董	二腫	一董	二腫
六語	七麌	六語	七麌
十一軫	十二吻	十一軫	十二吻
十六銑	十七篠	十六銑	十七篠
三講	四紙	三講	四紙
八霽	九蟹	八霽	九蟹
十三阮	十四旱	十三阮	十四旱
十八巧	十九皓	十八巧	十九皓
五尾	十賄	五尾	十賄
十五潛	二十祭	十五潛	二十祭

二十一馬 二十二養 二十三梗 二十四迴 二十五有
二十六寢 二十七感 二十八琰 二十九謙
去聲

一送 二宋 三絳 四寘 五未

六御 七遇 八霽 九泰 十卦

十一隊 十二震 十三問 十四願 十五翰

十六諫 十七霰 十八嘯 十九效 二十號

二十一箇 二十二禡 二十三漾 二十四敬 二十五徑

二十六宥 二十七沁 二十八勘 二十九豔 三十陷

入聲

一屋 二沃 三覺 四質 五物

六月 七曷 八黠 九屑 十藥

十一陌 十二錫 十三職 十四緝 十五合

十六葉 十七洽

平仄の變遷

平仄の事に就きては、尙ほ言ふべき事有り。
古は咨嗟咏嘆を重として、有の儘に述べたるが多き故に、毎篇同じ
調子にて歌ひ出すべしとは、固より定まり居らず、一句の中、或は
平字を多くし、或は仄字を多くし、或は無暗と平仄をたまたせにし
たるも有り、其變化して常無きが如く見ゆる中に於て、音節の妙を
具へしめたるもの、古牀の妙なり、されば一篇の句數も一定せざれ
ば、一句の字數さへも一定し居らず、長き短き入り亂れて、自ら一
の音節を爲さしめたるなり。
然れども、斯くして進み行く中には、其變化無端の中より、一の正
しき音節を搜り出すもの有りて、此に今牀を作り出すに至れり、そ

は變化多き調子は面白きに相違無けれど、變なるもの有れば必ず正なるもの有らざるを得ずといへる道理を悟りて、此に之を究めたるものならんか、しかも變といひ正といふは、假りに此に之を名けたるものありと雖、音樂に於ける自然の規則に照すも、抑ては揚げては抑へ、互に相救ふて最も諧和せるものを以て正となし、錯落離奇、忽ち急に忽ち緩に、一定の律を以て之を縛すると能はざるものを以て變となさば、何の差支あらざるなり。

かくて平仄の調子を一定したる時には、句數の長短をも之に因りて定め、字數の長短をも之に因りて定め、後の詩を作るものをして平も仄も必ず此規則に外るゝと無からしむ、正格此に一定して音節此に聞るべきもの有り、而して後に彼變格なるものを聞けば、其錯落離奇たるの妙、正格と對峙して愈よ其妙を覺ゆるに至るべし、最も諧和せる調子にあらざれば、常に聞きて厭倦を來さぬとの無き

故に、變格のみにては面白からぬ向きありしなりと知るべし。今躰の起りたるは唐の初期なれども、其起れるや、起りたるの日に起れるにあらすして、六朝の頃に已に之を胚胎せるもの少からず、其中に於ても五言八句の古詩が五言律の躰を具へたるもの、最も多し。

而して變に屬する者は、五言古詩、七言古詩、長短句、樂府にて、間々三言四言のもの無しと爲さず、其正に屬するものは、五言律、七言律、五言長律、五言絶、七言絶なりとす、時として七言の長律有り、九言十一言等の律絶有りと雖、そは文章游戲にて、才子が時に才を試たるに過ぎざれば、別に分類するを用ゐずとなす。昔人標符を定て、平字を○とさし、仄字を●となし、平仄孰れをも用ゆべきものを○となせり、今之に準じて、次第に平仄を述ぶるもの有ん。

孤平

平仄を述ぶるの順序は、便宜によりて筆を五言絶句に起し、七言絶句、五言律詩、七言律詩、五言長律に及び、古詩の平仄は暫らく之を他日に譲るべし。

絶句律詩の平仄に入るに先ちて、尙は一の注意すべきと有り、孤平といへるものは是なり。

孤平とは一箇の平字が二箇の仄字に挟まれたる場合を指し、俗に之を挟み平といふ、標符を以て之を示ば●○●となるべき時にして。

今牀に在りては最も嫌ふべきものなりとせ。

何故に孤平を嫌ふかといふに、前にも言へるが如く、音調の上に於ては、平は寧ろ正にして仄は寧ろ變なるが故に、仄字を多くするは音節の諧和を妨ぐるに至る事有り、特に兩箇の仄字相圍みて平字の

一人ばつちとなれる場合には、音節は却て錯落離奇となり、古牀の音節となりすまして、諧和せる調子を失すべし、故に平字は多く兩字を連下して互に相救はしめ、以て正しき音節を奏せしめんを要するなり、例ば白樂天の「先製兩裳贈二君」の如き、第四の平は第三第五の仄に挟まれたる格なれば、古詩なるが故に合格なれども、今牀ならば此様の事有るまじきなり。

されど孤平の嫌ふべきにも淺深ありて、音節の上に於て最も注意すべき點は孤平の最も嫌ふべき處なり、音節の上に於て最も注意すべき點とは、五言にては第二字、七言にては第四字をいふ、何故にといふに、上二下三の五言は、第二字よりして下へと推移するものなるが故に、第二字は第五字と對して相響應せねばならず、上四下三の七言に於ても亦第四字よりして推移するものなるが故に、第四字を重しとす、故に其大黒柱ともいふべき此一字にして調和を失はん

か、第五或は第七の結字も十分に響を生ずると能はざるに至らんとす、されば上の字にして仄ならば下の字を平にし、後の字にして仄ならば、前の字を平にし、以て此一箇平字の難を逃れしめて、音節を諧和せしむるを要す、尙ほ諸脉の下に於て例證を擧げて、之をば示すもの有らん。

しかも一句の諧和を妨げざるの處に在りては、間々孤平を用ゐて差支無となせり、七言の第二字に在りては、杜少陵の「可憐後主還祠廟」の如き、「每依北斗望京華」の如き、皆孤平なりとす、五言の第四字、七言の第六字に在りては、王摩詰の「回看射雕處」と云る。

李太白の「宮女如花滿春殿」といへる、皆孤平なりとす、要するに五言の第二字、七言の第四字に比すれば、一句の音節に關係するもの淺きを以て然るを得るなり。孤平の注意すべきは右の如くなれども、初學の者は往々に之を顧み

ず、○○○○の如き、○○○○の如き平仄を用ゆるもの少ならず、春濤翁曾て某氏の詩稿を朱批し、此種の誤謬多くして一々改むるに暇無き程なるより、各其上に誌して孤平孤平と書して返されたるに、某氏は翁の正を得て狂喜し、直ちに之をば梓に上せたりしも、固より孤平の何物たるやを知らざりしより、其儘に孤平孤平と刻しつけて得意なりし由、儲は孤平をば名譽なる評語ども思ひたるものと覺ゆ、笑止の至りなるかなどはやし立てられたると有り、少年諸子、それよく之に注意して、孤平先生の轍を襲ふと無ければ可ならん。

五絶の平仄 (上)

五言絶句に平仄無しとは古來より一派に唱なへられたる議論なり、そを例證ぞといふに、五言絶句といふ名は新らしけれども、五言四

句の躰を具へたるものは漢魏の古謠に於ても之を見るときを得べし、其頃そのころに於て平仄へいそく有るべき筈はず無ければ固もとより勝手かつて氣儘きまの音節いんせつなり、されば枯魚過河泣こぎょがわなみには

枯魚過河泣。何時悔復及。作書與魴鱖。相教慎出入。

といひ、古絶句には

蕞砧今何在。山上復有山。何當大刀頭。破鏡飛上天。

といひ、續つづきて六朝りくてうに至りては此躰このたいに乏ひんからねど、皆今日みなこんにちに説く所の平仄へいそくを用ゐず、故に唐人ことうじんに在りても王維わういの如きは必ずしも近躰きんたいの句法くはふに據らず、

空山不見人。但聞人語響。返景入深林。復照青苔上。

の如き、第一句は○を以て起り、第二句は●を以て起り、第三句の兩句は●を以て起る、是等は逆も今躰こんたいの平仄へいそくとあすべきものに非ず、要するに五言絶句は五言古詩なり、宜しく平仄無るべし

といふが此派の説く所なり。

五言絶句が古詩の一部より出たりと爲すは、或は其故無きに非ざるべし、しかも唐より以前の五言二十字は、勿論之を古詩として作りたるに相違無からん、されど唐に入りて諸躰漸く其法度を定め、絶句は律詩の半部を絶ちたるに由りて、今の名稱を得るに至りては、最早古詩とは縁無くして、近躰の範圍に入りたるものなりと言はざる可らず、已に近躰に入たる以上は、近躰に最要なる音節の諧和無くてはかなはず、好しや一二の例外に馳せ出づるもの有にもせよ、五言絶句の平仄は確として動かすべからざるもの有り。其一を平起といふ、第一句の第二字に平字を用ゆるによりて此名有り、今之を圖にすれば、

- 第一句
- 第二句
- 第三句
- 第四句

にして、之を唐詩に徴すれば、暢當の登鶴鷓樓に云く、
 廻臨飛鳥上。高出世塵間。天勢圍平野。河流入斷山。
 此中に○の符號を標せるは。前にも言る如く、●を用ゐても○を用ゐても差支無き場合を言ひたるものなれば、「廻臨飛鳥上」をば「歲窮將益老」と爲せるも有り、「高出世塵間」をば「洗手作羹湯」と爲せるも有り、「天勢圍平野」をば「坐厭淮南守」と爲せるも有り、是等は孰れにしても妨無けれど、第四句のみは同じく●に有りながらも注意せねばならぬ事有り。
 そは第一と第三の兩字が孰れも●なりとて、兩つとも●を用ちゆる時は、第二字のみは、知らず識らずの間に孤平となりて、最も嫌ふべき事となるべし、故に「河流入斷山」の如くに第三字を●にせば第一字は必ず○にせざるべからず、然らずして「夕陽千萬峰」の如くに第一字を●にせば、第三字は必ず○にせざる可らず、是孤平

を救ふの方なり、されど第三字が○あればとて第一字を●にせねばからぬといふ事は無し、「空中聞異香」「青山紅樹多」など其例は數ふるに暇あらず、其二は仄起と名く、第一句の第二字が仄字を用ゆるによる、圖にすれば

- 第一句
- 第二句
- 第三句
- 第四句

となりて、平起の平仄をば二句づゝ前後に倒置したるまでなり、之を唐詩に徴すれば李白の勞勞亭に云く、
 天下傷心處。勞勞送客亭。春風知別苦。不遣柳條青。
 平起の第四句は移りて仄起の第二句となれるが故に、孤平を注意せねばならぬも亦第二句に在り、「暫留魚子溝」「好隨郎馬蹄」などの句は、皆此處に在りて孤平を救へるものなりとす。

五絶の平仄 (中)

前に之を述べたる如く、五絶の第一句は、平起なれば○○○●となり、仄起なれば●○○○となり、此句には韻を踏まぬが通例となり居れり、されど韻を用ゐぬと極まつた譯にはあらず、都合次第にては随分韻を押たるものも少からぬなり、例を唐詩に徴すれば、
盧綸の塞下曲に云く、
月●黑●雁●飛●高●。單●于●遠●遁●逃●。欲●將●輕●騎●逐●。大●雪●滿●弓●刀●。

是仄起にて第一句に韻を踏みたるなり、令狐楚の從軍行に曰く、
胡風千里驚。漢月五更明。縱有還家夢。猶聞出塞聲。

是平起にて第一句に韻を踏みたるあり。

已に韻を踏むとすれば、通常の平仄にては當てはめられぬかといふに、たゞ其第四句と同一やうに作れば善いといふまでなり、されど

○に屬すべき第一字は、時有りて第四句と異なる場合無きに非ず、平起にて第四句は○○●●○なるに、第一句は○○○●○となり、又は●○○○●○となるも、亦差支無し、「胡風千里驚」と「猶聞出塞聲」の如き、又其一例なり。

平韻の五絶は已に之を盡せり、仄韻の詩は有らざるか。元來五絶の形は古の歌謠などに淵源し來りたるものなる(上)に説きたる如くなるが故に、其來るの古だけに七言に比して古色多きは此賦の特質なり、古色の多き結果として、五絶の仄韻は其數少なからず、古賦を學びて故らに仄韻を用ゐたるか、將た又仄韻を用ゐたるが爲に古色を存せるかは、且らく之を措く、普通の場合に於て今賦に在りて仄韻を用ゆるものは、獨り五言絶句有るのみなればこそ、或は直ちに之を古詩に入れんとするものも有りたるなれ。
已に仄韻の詩有り。近賦中の五言絶句としては平仄の一定したるも

の無かるべからず、唐人は果して如何になせるぞ。
唐時代の仄韻五絶は、多く古歌謠を丸呑にしたる調子にて新たに嚴
肅なる方式に従はんとしたるは、割合に少し、王維の「寒山不見人」
は前に之を擧げたり、李端の拜新月に云く、
開簾見新月。即便下階拜。細語人不聞。北風吹裙帶。
拜は卦韻なり、帯は泰韻なり、兩韻を通じて借り用ちるるもの
に、近躰には頼母しからぬが上に、第一句は平聲を第五字に用ゆべ
きをば變じて仄字を用ゐたり、それも卦韻か泰韻なれば格別、縁も
由縁も無き月字が飛出すが如き、到底近躰にて見るとを得ざる平仄
なりとす、第三句の第三字を平にして第四字を仄にしたる、第四句
の中三字を平にしたる、皆音調を諧和せしめたる今躰とは見るべか
らず。

五絶の平仄 (下)

されど既に近躰に入りたる以上は、仄韻なりとて容赦はならず、通
常其平仄を一定して之に遵はしむ、其平起にては

○●○●○ 第一句

○●○●○ 第二句

●●○●○ 第三句

●●○●○ 第四句

となり仄起にては

○●○●○ 第一句

○●○●○ 第二句

○●○●○ 第三句

○●○●○ 第四句

とある、平起は平韻の仄起をば二句づゝ顛倒したるまでにして、仄
起は同じく平韻の平起をば二句づゝ顛倒したるまでなり、唐人に在
りては皮日休の閑夜酒醒に

醒來山月高。孤枕群書裏。酒渴漫思茶。山童呼不起。

といへる、以て平起の例と爲すべく、皇甫曾の山下泉に
漾漾帶山光。澄澄倒林影。那知石上喧。却益山中靜。

といへる、以て仄起の例と爲すべし。

但し仄起の第二句は宜しく○○●●とあるべきに、「澄澄倒林影」
となり居れり、元來第三字を拗して●○●と爲すは、調子の平板に
流るゝをば避けたるものにて、初學には餘り望しからぬ事ながら、
少しく腕に覺有るに至れば、時に之を爲すを妨げず、されば平韻の
五言絶句に於ても「河橋不相送」といひ、「秋風不相待」といひ、「心
視春草」といひ、「移舟近烟渚」といふ、皆第三字を仄にせるものなり。
而して第三字を仄にするは、獨り○○●○○の場合にのみ然にあら
ずして、●●○○●もまた●●●○○となる事有り、其調子の平板
に流るゝを救ふに出でたるは、前者と其理を同じくす、「開篋淚沾臆」
の如き、「馬首向何處」の如き、「海鏡一爲別」の如き、「三日入厨下」

の如き、皆然りと爲す。

諸五言絶句は今牀の一牀として、平仄は一定せられたれば、初學の
此牀に指を染めんとするものは、宜しく其規則に遵うべく、漫然筆
を下すべきにはあらずること、右にて略ぼ之を盡したり、更に翻へ
て唐以前の詩に遡りて五言二十字の詩を檢し、果して平仄は皆無な
るや否やを問はんか。六朝に在りて、次第に聲律を講ずる傾を生じ
たるは、氣運の然らしむる所なり、されば五言二十字に於ても其平
仄諧和して、唐人の五絶と合せるもの有り。例せば庾信が、和侃法
師に

秋分俱渡河。客遊經歲月。羈旅故情多。近學衡陽雁。
といへるは、純然たる平起の格にして、江總が九月九日行薇山亭に
心逐南雲逝。形隨北雁來。故鄉籬下菊。今日幾花開。
といへるは、純然たる仄起の格なり、其餘二句の相叶へるものを求

にして、王昌齡の殿前曲に、

昨夜風開露井桃。

未央前殿月輪高。

平陽歌舞新承寵。

簾外春寒賜錦袍。

と有るが如き、是なり。

仄韻の七言絶句は元と變躰に屬す。余曾て三躰詩を評釋して、結句則ち峭然として收まらんことを要すといへり、又已むを得ずして之を爲し、爲せば必らず聲調の揚がるやうに爲さるべからざるをいふなり、三躰詩に録する所は、高適の營州歌を首めとして、都合六首なり、何れも平仄を不正にして、宛然たる古躰なり、例せば「狐裘蒙茸獵城下」の如き、「日午獨覺無餘聲」のとき、「上天下天鶴一隻」の如き、「日暮忘却巴陵道」の如き、之を一句とするも尙ほ近躰と見ることを得ざるの平仄なりとす、思ふに其變躰なるが故に、強て聲調を諧ふるを欲せざりしものならん。

されど既に近躰中の七言絶句として之を見れば、勿論一定の平仄無きにあらず、

●○○●○○● 第一句

●●●○○○○● 第二句

●●●○○○○● 第三句

●○○●○○○○● 第四句

を平起の格とし、

●●●○○○○● 第一句

●○○●○○○○● 第二句

●○○●○○○○● 第三句

●●●○○○○● 第四句

を仄起の格とす。

七言絶句の平仄 (下)

七言絶句の平仄は、概して五言絶句の上に二字を冠したる趣有り、されど第一句のみは、稍や別様の致を爲り、それは五言絶句にては、韻を押さぬことを以て正格と爲し居れども、七言絶句にては、韻を

押すことを以て正格と爲すなり、何故に一は韻を押すこと、なり、一は韻を押さぬこと、なりたるかは、古人の之を正説せるものあらざるも、略ぼ之を想像し得べし。

蓋し、七言絶句にては一句七字にて、二句を一氣に讀下さんこと覺束無く、しかも其大部は一句一意なるが故に、一意一句にて韻を押さぬときはどうやら忘れた時に韻字が來るといふ安排にて、聲律を諧はしむること難し、故に調子を合せんには、是非とも一句にて韻を押さねばならぬなり、是ぞ即ち七言絶句の第一句が五言絶句と異なりたる所以ならんと思はる。

然れども、七言絶句も亦時に變格として、第一句に韻を押さぬこと有り、俗に之を踏落しと名く、踏落しに在りては、

●○○●○○●
●○○●○○●
●○○●○○●
●○○●○○●

を平起の格とし、

●○○●○○●
●○○●○○●
●○○●○○●
●○○●○○●

を仄起の格とす、白居易の「會裁楊柳江南岸。一別江南兩度春」は平起にして、王維の「獨在異鄉爲異客。每逢佳節倍思親」は仄起なり。

此に注意すべきは、踏落しは素と七言絶句の變格に屬するものなるが故に、己むことを得ざるの場合に於て之を用ゆべし、使はずとも善きに之を用ゆる時は、讀む人をして、此韻中に恰好なる文字を搜り出すこと能はざるよりして、此窮手段を取りたりと思はしむるの嫌有り、杜牧の登樂遊原に

長○空○澹○澹○孤○鳥○沒○
萬○古○銷○沈○向○此○中○
看○取○漢○家○何○事○業○

五○陵○無○樹○起○秋○風○

といへるを、楊用修は一本に據ると稱して「長○空○澹○澹○沒○孤○鴻○」と改めたり。孤鳥沒にても沒孤鴻にても、意義に變りは無けれども、其

改めたる所以のものを究むれば、蓋し、踏落しに屑とせざるもの
りしを知るに足れり。
昔人或は云く、踏落しを用ゆるは、必ず第一第二の兩句を對語とす
る場合なるべしと、此説は前二句を對となすものは、七言律の後半
を絶ちたるものなりと、云へる説に基づけるものあり、されば必ず
しも其説に従ふを要せざることを勿論にて、對語の外にても韻を押す
よりは押さぬ方向意を強むる場合にては、踏落しを爲すに差支無か
らん、前に擧げたる白居易の句の如き、「江南岸」を點出するに非ざ
れば、以て題意を發揮するに足らざる時は、韻を押さざる方尤も然
るべしと爲すなり。
されど古人の名作と稱するものを檢するに、其踏落しに係るものに、
對語を用ゆるもの少なからず、昔人の説有る所以なり、今其二三を
擧げんに、

岐王宅裏尋常見。

聖九堂前幾度聞。

正是江南好風景。

落花時節又逢君。

受降城外月如霜。

不知何處吹蘆管。

回樂峰前沙似雪。

一夜征人盡望鄉。

潮打空城寂寞回。

山圍故國周遭在。

夜深還過女牆來。

淮水東邊舊時月。

夜深還過女牆來。

潮打空城寂寞回。

淮水東邊舊時月。

夜深還過女牆來。

潮打空城寂寞回。

淮水東邊舊時月。

の如き、皆是なり。

五言律の平仄

五言律は五言古詩の變なり、六朝の時に方りて、氣風概ね駢儷の一
方に傾きたるなり、文章は四六を以て才を競ひ、詩に於ても亦自ら
對偶を以て其藻を鬪はさんとするに至れり、殊に沈約が平上去入の
四聲を定めてより、音韻の上よりして調子を定めんとするの傾向い

よく盛んに、五言古詩の句數を限らざるものも、漸く八句四十字の體裁を定めんとするに至り、或は全首を對にし、或は前六句を對にし、或は中の四句を對にし、種々其體裁を試たるの後、遂に中二聯を對句にし、前二句と後二句を散句にするものを以て、自然に一箇五言律の形式をば作り成せることゝなれり。

而して、約が八詠の詩に
登臺望秋月。會浦臨春風。秋至愍衰草。寒來悲落桐。

夕行聞夜鶴。晨征聽曉鴻。解佩去朝市。被褐守山東。

と云るが如きは、未だ悉く今の平仄に該當せずと雖、音律は概ね諧和にして、體裁も相同しく、全對格の五律として之を見る事を得べし、しかも唐以前の詩に在りて、此體裁を具えたるもの洵に少しと爲さざるも、唐に入たるの後、始て五言律の名を定め、純乎として五言古詩の外に立たしむるとなり、平仄も亦此に一定せるなり。

岑參が磧西頭送李判官入京に

一身從遠使。萬里向安西。漢月垂鄉淚。胡沙費馬蹄。

尋河愁地盡。過磧覺天低。送子軍中飲。家書醉裏題。

といへるが如きを平起の格とし、玄宗が幸蜀西至劍門に

劍閣橫雲峻。鑾輿出狩回。翠屏千仞合。丹嶂五丁開。

灌木縈旗轉。仙雲拂馬來。乘時方在德。嗟爾勒銘才。

と云へるが如きを仄起の格とす、今之を圖示せば左の如なるべし、

平起格

●○○●● 第一句

●○○●● 第三句

●○○●● 第五句

●○○●● 第七句

仄起格

●○○●● 第二句

●○○●● 第四句

●○○●● 第六句

●○○●● 第八句

●○○○● 第一句
 ●○○●● 第三句
 ●○○○● 第五句
 ●○○●● 第七句
 ●○○○● 第八句
 ●○○●● 第六句
 ●○○○● 第四句

要するに五言絶句を二ッ重ねたるものと見て、不可なかるべし、されど通常は韵を踏まざる第一句も、押韵すること五言絶句の變例の如きこと有り、さある時は平起にては○○●○○となり、仄起にては●○○○○となる、張巡が聞笛に

岩曉試一臨。 虜騎附城陰。 不辨風塵色。 安知天地心。
 門開邊月近。 戰苦陣雲深。 且夕更樓上。 遙聞橫笛音。

といへるは平起にして、蘇頲が奉和登驪山高頂應制に
 仙蹕御層氛。 高高積翠分。 巖聲中谷應。 天語半空聞。
 豐樹連黃葉。 函關入紫雲。 聖圖恢宇內。 歌賦少橫汾。

といへるは仄起なり。其外五言律中に於て、故に音律を拗折したるもの無きにあらねど、今は且らく之を措き、先づ其通常なるもののみを説くのみ。

五言長律の平仄

五言律は八句に限りて未だ才人の技倆を盡すに足す、さればとて古詩あらんには錯綜變化の妙有るも、規律を正くすべきにあらず、堂皇偉麗の中に於て縦横馳騁の才を露はさんとするには、他に聲律を正くせる所の長篇を要するなり。

五言長律は正に之が爲に起る、長律は五言律の八句なるものをば、延ばして十句百句とも爲したるものあり、二句を一韵として、何韵なりとも、意を盡までは筆を下すことを得せしむるものなり、其軀裁はいかにといふに、五言律は一二の二句、七八の二句に散句を用

る、中二聯に對句を用ゐ、長律も亦其句數いかに多し、首の二句、結の二句をば散句とし、その餘は皆對偶の文字を用ゆることゝす、蓋し、六朝時代の古詩は、已に對偶の端を開き、每聯相儷し、數韻を重ねて、殆ど長律の形を爲せるもの有り、唐人其形によりて、音律を整え、平仄を定め、以て此一聯を開くに至るなり。長律の平仄は、四句毎に其音節を一にせしむると、亦五言律に同く、たゞ之を積累せしめたるのみ、則ち前四句にして仄起ならんには、次の四句をも仄起と爲し、前四句にして平起ならんには、次の四句をも平起と爲す、今仄起格の例として、陳子昂の白帝懷古の什を擧ぐ可し、

日落滄江晚。 停撓問土風。 城臨巴子國。 臺沒漢王宮。
荒服仍周甸。 深山尙禹功。 巖懸青壁斷。 地險碧流通。
古木生雲際。 歸帆出霧中。 川途去無限。 客思坐何窮。

起の四句、「日落滄江晚」の仄起なるが故に、次の四句、「荒服仍周甸」

の仄起を以て承け、次の四句、又「古木生雲際」の仄起を以て承ぐ、しかも日落停撓と川途客思の四句を除くの外は、皆對語を用ゐたるものなり、平起を用ゐたるものも亦其例正に相同じ。されど長律は音節を諧和して偉麗ならしめたるものなるが故に、其句格自然に莊重となり、從て首二句までも對語としたるもの、五律に比ぶれば更に多し、盧照隣の「地道巴陵北。天山弱水東。張説の「禮樂逢明主。韜鈴用老臣。」の如き、皆然りと爲す、而して起句に韻を押すものは、亦五律の平仄と其例を同くす、盧僊の「佳氣曉葱蔥。乾行入震宮。駱賓王の「鷺嶺鬱岩曉。龍宮鎖夕寥。」の如き、是なりとす。

五言長律と五言律とは、其平仄も亦此の如く相同じと雖、其少しく異なるもの一有り、そは五言律に在りては、平仄較や寛大にして第三字は時に拗して●○○●○とも爲すべけれど、五言長律に在り

ては、概ね規則通に〇〇●●〇と爲るなり、五言長律の平仄が、此の如く嚴整なる所以の者は、思うに一方に於ては之をして偉麗ならしめんが爲に之に至り、一方に於ては之を試帖に供したるが故に之に至りたるものならんか。

試帖とは何如なるものぞ、唐の時才を試みて第に登らんとするもの皆詩を以て之を取り、課するに題を以てし、五言長律を賦せしめ、之をば試帖と名く、例せば錢起は「湘靈鼓瑟」といえる題にて、陸贄は「禁中古松」といえる題にて、獨孤綬は「藏珠于淵」羅讓は「閏月定四時」といへる題にて試られ、概ね皆六韻十二句を以て賦し得ること、なれり、此試帖なるものは、傳へて今日に至り、會試郷試皆詩の科有り、只舊時は六韻なりしもの、今は八韻十六句となりし之差有るのみ。已に題を出して之を課すれば、試らる、者は、一意其題目にのみ拘

泥して、寸毫も其外に出づることを許されず、徒に題意に照して字句を排比し、以て及第に資するに至る、長律に排律の別名有る所以の者は之が爲なり。

七言律詩の平仄

七言律詩は五言律詩より轉じ來れるなり、五言古詩一變して五言律詩の一脈を生じ來れるや、更に之を七言に應用して、一格を創成せる者、即ち是なり、事は唐の初に在りて、しかも同時の作者競ふて之を作り、高亮にして誦すべきもの多し、されど畧ぼ其脉裁を具へたるものは、間々唐以前に於て之を見ること、五言律詩と異なること無し。

七言律詩の平仄は、先づ同じ格の七言絶句を累ねたるものと見做すことを得べし、但し前の二十八字は、全く絶句の正格を用ゆるも、

後の二十八字は、踏落しの格を用ゐたるものとす、即ち平起の格にしては

●○●●●○	第一句	●●●○●○	第二句
●●●○●○	第三句	●●●○●○	第三句
●○●○●○	第五句	●○●○●○	第五句
●●●○●○	第七句	●●●○●○	第七句
●○●○●○	第八句	●○●○●○	第八句

となり、仄起の格にしては

●●●○●○	第一句	●○●○●○	第二句
●○●○●○	第三句	●○●○●○	第三句
●●●○●○	第五句	●●●○●○	第五句
●○●○●○	第七句	●○●○●○	第七句
●○●○●○	第八句	●○●○●○	第八句

となる、杜甫の秋興に

瞿唐峡口曲江頭。萬里風烟接素秋。花萼夾城通御氣。

芙蓉小苑入邊愁。珠簾繡柱圍黃鵠。錦纜牙樯起白鷗。

といへるは、平起の正格にして、李商隱の籌筆驛に

魚鳥猶疑畏簡書。風雲長爲護儲胥。徒令上將揮神筆。

終見降王走傳車。管樂有才眞不忝。關張無命欲何如。

といへるは、仄起の正格なり、通常絶句の正格に累ねたるものなら

んには、杜詩の「圍黃鵠」と、李詩の「眞不忝」とに、韻を押すべ

き處なるをば之を押さず、故に踏落しの格を用ゐたるものと見做せ

ば不可なし。

或は又起句にも韻を押さずして、踏落しの格を用ゐたるものなり、

平起にては

●○●○●○

となし、仄起にては

●●○○●●

となす、其第五句と同一なりと知るべし、武元衡の酬嚴司空に

金貂再入三公府。玉帳連封萬戶侯。

といへるは平起にて、皮日休が館娃官懷古に

艷骨已成蘭麝土。宮牆依舊壓層厓。

といへるは仄起なり、前者は對語を用ゐて起し、後者は單行を以て起す、皆時に臨みて自然に成るに任するなり。

拗 躰

今躰の詩は、素と聲調を諧へ、音節を和らげ、聞くものをして、自ら容雍和平の想を爲さしむるに在り、しかも其諧和せるの音節聲調を拗折して、奇古ならしむるもの、即ち平仄を規矩の外に馳せて、尙は今躰の聲律に背かざらしむるものにして、之を名けて拗躰といふ。

ふ。

音節を拗するに、二種の別有り、一は句を拗する者にして、一は詩を拗せるものなり、甲は一句の中に於て、平仄の正格と同じからざるもの有るを言ひ、即ち平なるべき處に仄を用ゐ、仄なるべき處に平を用ゆるを言ふ、乙は句としては平仄全く合すれども、其半を變換せるものを言ふ。

五言絶句にては、太上道人の答人に

偶來松樹下。高枕石頭眠。山中無曆日。寒盡不知年。

と言ふが如き、起承の平起格に準じたらんには、轉結は●○○●

なり、七言絶句にては、張敬忠の邊詞に

五原春色舊來遲。二月垂楊未掛絲。即今河畔水開日。

正是長安花落時。

といふが如き、亦平起格の一二に接するに仄起格の三四を以てしたるものなり。
平起格の平仄に接するに、仄起格の平仄を以てし、仄起格の平仄に接するに、平起格の平仄を以てす、音節固より拗折すと雖、句としは平仄尙ほ相諧ふ、是獨り絶句に於て之れ有るのみならず、五七言律詩に於ても、亦時に後半の平仄を拗折するもの有るを見る、蓋し、其已むを得ざるの時、此格を爲すものありとす、強て之を學ばい、巧を求めて却て拙なるを免れざるべきのみ。若し夫れ句を拗するものに至りては、他日を期して之を述ぶるもの有らんとす。

少年詩話終

續少平詩話

詩の變遷 (一)

詩の起るや古し、其變遷を詳論せんことは容易なる業にあらざれども、詩を作るものは、其大要なりとも知り居るべきは、論を待たず、朝に五字を綴り、夕に七字をならぶるも、歴代の詩人の名すらも諳せざる如きは、大に慚ぶべきの事ならん、今支那上古よりの詩に就きて述ぶる所有るもの、簡は則ち簡なれども、意は則ち聊か存する所有るなり。

詩を言ふものは必ず三百篇を以て基とす、三百篇は經なり、先聖の教を奉ずるものは之に由りて説を爲す所有るや固とに宜し、然れども、三百篇以前に詩無しとはいふべからず、三百篇は體製已に略ぼ

具備したるものなれども、其未だ完全せざるに先ちて、早く已に咨嗟歎の際に發したるもの少からず。

古人は稱して、詩は擊壤康衢の二歌に創まるといふ、二歌は共に堯の時に成る、帝王世紀に據るに、帝堯の世、天下大に和し、百姓事無かりしかば、老人壤を撃ちて。

日出而作。日入而息。鑿井而飲。耕田而食。帝力于我何有哉。

と歌ひたり、是所謂擊壤の歌なり、列子に據るに、帝天下を治むること五十年にして、天下の治まるか治まらざるかを知らず、億兆が果して已れを戴くことを願ふや否やを驗さんと欲し、乃ち微服して

康衢の間に遊びたるに、兒童謠ふて云く、
立我蒸氏。莫匪爾極。不識不知。順帝之則。

と、堯喜び、誰か爾をして此言を爲さしめたるやと問へば、之を大夫に聞けりと答ふ、之を大夫に問へば、是古詩なりと答へたりとい

ふ、是所謂康衢の歌なり、二首共に堯が無爲にして天下を治め、天下皆其太平を樂みて、優游自ら適せるの意を述べたる者なり、其作者は固より之を知る可からずと雖、其知るべからざるものは、偶々以て詩は咨嗟歎の際に出るものにて、人々皆詩を作り得べきものなることを知るに足るなり、

堯より以前に在りては、伏羲氏に網罟の歌有り、神農氏に豊年の詠有りと稱すれども、其辭は佚して傳はらず、少昊氏の父母に皇娥白

帝の二歌有れども、僞撰に係れるものなること、已に定説有り、偕は康衢擊壤の二歌こそ最も古きものなれといふなり。

舜に至りては皐陶と唐和せるもの、虞書に出で、卿雲を歌ふて、八伯が之を和したるもの、尙書大傳に見ゆ、是明らかに後人唱和の源

を爲せるものといふべし、舜に又南風歌有り五絃を彈じて唱へたるものなりといふ、辭に云く、

南風之薰兮。可以解吾民之愠兮。南風之時兮。可以阜吾民之財兮。物に觸れ、事に應じ、念々民を離れざるの詩にして、二十六字皆至誠に發し、三千年の下、尙は且つ聖人の心を窺ひ知ことを得べし、豈た劉綽の所謂辭達するのみならんや。

詩の變遷 (二)

夏にては五子歌最も著はれ、殷にては桑林禱辭最も誦すべし、五子は帝太康の弟なり、太康が遊田に耽りて民事を恤ひず、遂に羿の爲に追はれて國に反ることを得ざるを怨み、大禹の戒を述べて以て歌を作れるものなり、禱辭は湯の作る所と稱せらる、年の早せるに會ひ、自ら責めたるの語なり、前者は三言四言より九言に至るまで、行くがまゝに之を用ゐ、後者は四言を以て之を行き、句尾は皆與の字を以て、疑問の詞として結びたり、蓋し、前は奈何ともすべから

ざるの情、發して詩をなせるものにして、後は神に禱りて自ら罪するものなり、二者体裁の異なるは、亦自然の數ありといふべし。周初に至り、其最も流傳せらるるものに二有り、一を麥秀歌とし、箕子の作る所と爲す、殷已に亡びたるの後、箕子周に朝し、途に殷の故墟を過ぎ、宮室の毀壞せられて禾黍を生せるを見、之を傷みて歌ひたるに云く、

麥秀漸漸兮。禾黍油油。彼狡童兮。不與我好兮。

と、其哭して哭をなさず、泣して泣をなさざるの際、涙は具さに文字の外に在り、歴代の遺民をして數々誦するに忍ざらしむるもの、故無きに非ずといふべし、一を采薇歌とし、伯夷叔齊の作る所と爲す、武王已に殷の亂を平らげ、天下周を宗とせるも、夷齊は獨り之を耻ぢて、周の粟を食はず、薇を首陽山に採りて歌ひたるに云く、

登彼西山兮。采其薇矣。以暴易暴兮。不知其非矣。神農虞夏忽

焉沒兮。余安適歸矣。吁嗟徂兮。命之衰矣。
と、其一片歌々の心は、自ら信ずる所を行ふて顧慮する所なからしめたり、孔子が「仁を求めて仁を得たり、又何をか恨みんや」と頌せしもの、良とに以有るなり。

而して周の盛なるに至りて、詩は略ぼ体裁を具へ、四言を以て主と爲し、餘は時に應じて之を爲せるに似たり、其文物の隆然として起れるものは、詩經に見て之を知るべきなり。
史に據るに、古は詩三千餘篇有りしを、孔子に及びて、其重なれるを去り、禮義に施すべきを取り、上は契后稷を采り、中は殷周の盛を述べて、幽厲の缺に至るといふ、故に刪餘の三百篇は、中に就きて其尤なるを採りたるものなるべく、以て當時の文物を察するに餘り有り、蓋し、周の盛時、郊廟朝廷の言は粹然として正しく、郷黨閭巷の詞は霽然として和らぎ、前には周公旦の如き有り、大手筆を

揮ひて、先功を頌し民瘼を恤ひ、後には尹吉甫の如き有り、穆たること清風の如きを以て、勳業を紀述し、其事其詩並びに千古に炳耀するに足れり、しかも列國の詩は、天子時に巡狩して之を采り、黜陟の典を行ひたりしも、孔子の時に及ては、既に廢して行はれず、孔子も亦其位にあらざるを以て、自ら之を勸懲することを得ず、爲に之を刪りて其教を施すに至れるなり。

經は分ちて四と爲す、一を風と曰ふ、民俗歌謠の詩なり、概ね皆民間の語にして、讀めば以て其俗尙の善惡を知るに足る、而して周南召南を以て之に冠す、二南は親しく文王の徳を被ふりたるを以て、獨り風教の正を得たりと爲すなり、中に就きて、樂で淫せず哀で傷らざるの關雎は、實に其首に居る、二を小雅と曰ひ、三を大雅と曰ふ、雅は正にして正樂の歌なりとす、小雅は燕饗の樂にして、鹿鳴を首とし、大雅は會朝の樂にして文王を首とす、四を頌と曰ひ、盛

徳の形容を美して、其成功を以て神明に告ぐるものなりといふ。周頌を以て主と爲し、魯頌商頌之に附す。風雅頌の体たるや、各一ならず、其言ふ所はまた皆齊からずと雖、皆性情の正に出で、風教に資すべしと認められたるものに非ざるは無し。されば男女思慕の詞を以て、朝廷郊廟の詩と伍せんことなとは、後世腐儒の夢想し得ざる所なるべく、所謂詩は正にして葩あるもの、長く經中の特色として見るべし、故に云く、詩の三百篇は、一言を以て之を蔽へば、思の邪なる無きなりと。

詩の變遷 (三)

詩の經として存せられたるは、三百に過ぎざれども、是よりして後、一時口を衝きて韻語を試みたるものは、史上に見ゆるもの愈多し、或は當局者の施政を可否せるあり、城を築けるによりて歌るあり、

物に托して歌へるあり、隠れんとして歌へる、酒に對して歌へるなど、周の代のみにても數ふるに暇あらざる程なり、孔子の如きも、去魯歌ありとせられ、蟋蟀歌ありとせられ、臨河歌楚聘歌ありと稱せられ、獲麟歌龜山操ありと稱せられ、其歌は各書に散見して、優

に孔子の詩才に富めるを見るに足らしむ。しかも此時代の詩に於て、最も善く人の知りたるものを尋たらんには、先づ指を寧戚の飯牛歌に屈すべしとす、相傳ふ、齊の桓公の時は、戚之を干さんとせしも、其道を得ざりしにより、牛角を攀ちて三章の歌を誦したりしかば、桓公之を聞きて非常の人なりとなし、後車に載せて國に歸り、授くるに政を以てしたるなりと、其中篇に云く、

滄浪之水白石粲。

中有鯉魚長尺半。

弊布單衣裁至骭。

清朝飯牛至夜半。

黃犢上坂且休息。

吾將捨汝相齊國。

詩中に言ふ所の何如は、今しばらく之を措き、七言六句の古詩とし
て、前四句を以て一韵とし、後二句を以て一韵とし、當時に多く用
ゐられたる兮字の如きは、一も之を用ゆること無し、全く七言古詩
の源とも見做すべきものなりと思はる。
秦の初に在りては、易水歌もまた人の善く知れる所なり、其文句は
と言へば、たゞ僅に

風蕭蕭兮易水寒。 壯士一去兮不復還。

の十五字に過ぎずと雖、荆軻が死を決して秦に入れる光景は、具さ
に此中に見はれて、悲壯なること此上も無し、されば沈徳潜も之を
評して、「今に至りて之を讀むも、猶ほ變徴の聲を存するが如し」と
いへり、當れりといふべし。

ついで項羽に垓下歌有り、高祖に大風歌有り、
力拔山兮氣蓋世。 時不利兮騅不逝。 騅不逝兮可奈何。

虞兮虞兮奈若何。

といへるを讀みては、鬼雄の末路を憐み、

大風起兮雲飛揚。 威加海内兮歸故郷。

安得猛士兮守四方。

といへるを讀みては、英主の豪懷を想ふべく、兩兩相對して偉觀を
爲す、しかも兩者ともに七言の句調を以て之を出したるは、亦異な
りといふべし。

漢は武帝に至りて、文學蔚然として起り、帝もまた諷詠の才を具し
たりしより、河東に行幸して后土を祭り、顧て帝京を視ては、秋風
辭を作り、河の決せる所に臨みて、其功の未だ就らざるを悼みては
瓠子歌を作り、大宛を伐ちて天馬を得ては、蒲梢天馬歌を作り、李
夫人歌を作り、落葉哀蟬曲を作り、又栢梁臺を築きては、群臣二千
石に詔し、能く七言の詩を爲くるものは、坐上ことを得せしめ、

人毎に一句を賦して、各其志を言はしめ、以て後世聯句の祖を爲せり。
而して上の好む所已に此の如くなりしを以て、名士は雲の如く集まり、各其才を鬪はしたるが中に、古詩十九首の如きは、奇句の人目を新にし、險語の人耳を驚かすものなしと雖も、情を述べて情盡さず、思を言ふて思餘有り、其作者は今之を詳にせざるも、其中枚乗が此の時に作る所のものも有りといふ、しかも最も注意せざるべからざるものは、從來の詩は、短くして三言四言、長して八言九言、皆其成るがまゝに任せて、必しも之を同一の規矩にあてはむることを要せず、中或は確然同じ句法を用ゐたるもの有りたれど、それは却て正格にては非ざりしに似たり、さるを十九首の時に至りては、徹頭徹尾、五言を以て之れを爲し他の句格をば混用せず、しかも句を鍊り、格を鍊り斷篇零辭なりし詩を一進せしめて、純然たる体裁

を具へしめたるに似たり、思ふに音調の錯落たりし從來の詩よりして、一定の規律を搜し出したるものは、亦單純より複雑に移れる自然の數なりとも言ふべく、從て五言古詩を以て詩の正格なりとして唐代に至るに及べり、眞に詩道の一大變遷といふべきなり。

詩の變遷 (四)

枚乗と先後して、韋孟の諷諫詩有り、東方朔の誡子詩有り、共に四言を用ゐ、卓文君の白頭吟有り、蘇李の唱和有り、ともに五言を用ゆ、蘇李の唱和と云るは、蘇武が匈奴に使して、爲に捕られ、十九年の久しきを経て、始て漢に歸ることを得たるにより、詩四章を賦して、別を妻子に告げ、又李陵に別れたるなり、陵は舊と漢の將にして、兵敗れて匈奴に降しもの、武の國に歸るを見て、轉た身世の感に堪えず、詩三章を作りて武を送りたるもの、是なり、此唱和

は、情を寫すこと欸欸、淡にして彌よ悲しとも稱せられ、一片の化機、人力に關せずとも稱せられ、其格に於ける、其思に於ける、俱に正宗と做すべきもの有るが故に、後には此唱和を目して、直に五言の祖ありといふもの有り、されど枚乘の作にして果して十九首中に存在したらんには、蘇李よりも早く此体を試みたるものなりといふべく、卓文君もまた、此唱和に先だちて此体を賦したるなり、五言の源は蘇李の唱和なりとは、言ふべくもあらず。
是より後に至ては、揚暉の南山歌の如き、班婕妤が團扇歌の如き、梁鴻が五噫歌の如き、蘇伯玉が妻の盤中詩の如き、皆漢代に名高きものとして、人の能く知る所なり、盤中詩を除きては、皆短々たる詩篇にて、皆一時懷に藏する能はざるの衷、發して韻語を爲せるものと思はる。
當時に在りて、作家は常に絶えず、其史上に見ゆるもの、亦少きに

あられざれども、無名の詩人は更に夥しき數なりしならんと思量せらる、そは全く漢の樂府歌辭なるものゝ現存せるにて知らるべし、樂府は詩を以て樂に合し、以て之を歌奏せしめたるなり、或は之を郊祀に用ゆ、練時日といひ、惟泰元といひ、朱明といひ、西顛といへるが如きもの、皆祭儀の歌辭なりとす、或は之を軍中に用ゆ、戰場南、臨江臺、有所思の如きもの、皆鐃吹の曲なりとす、或は相和の曲と稱して、江南曲有り、陌上桑有り、薤露歌、蒿里曲有り、通常相互に歌唱せるもの之に屬す、或は其調子によりて、之に分ち、君子行の如き平調曲有り、相逢行の如き清調曲有り、善哉行、隴西行の如き瑟調曲有り、或は舞曲歌辭としては淮南王篇の如きもの有り、雜曲歌辭としては、傷歌行の如きもの有り、今一々之れを數えんには、指を僂するに暇あられざれども、要するに皆其作者を詳にせざるものなり、而して後の漢詩を稱するものは、皆此無名の作者を推し

て、之に私淑するに外ならず、蓋し、其一分は、官府の才俊が命を奉じて之を作れるものなるべく、其一分は、民間の士女が咏嘆の餘に出でたるものなるべし、始より必傳せしむるに意なかりしは、却て傳はりて今に至る所以なり。

此際に在りて、尙ほ一の記すべきものは、孔雀東南飛の一篇なりとす。孔雀東南飛は漢末の廬江府の小吏焦仲卿が妻劉氏の爲に作れるものなり。劉氏は十七にして仲卿の婦となり、日々に素を織りて高堂に事えたれども、岳母の容るゝ所とならず、岳母は仲卿に迫りて之を出さしむるにより、仲卿已むことを得ず、暫らく其父家に歸りて、再び迎ふるの日を待たしむ、劉氏もまた兩心の變せざらんことを約し、翌日妝を束ねて、先づ岳母に辭し、次で小姑に別れ、仲卿が府に赴くと共に家を出て、途に於て相別れ、父家に至りて居ること十日、縣令早くも媒人をして其子の爲に娶らんことを求めしむ、

劉氏仲卿の故を以て之を辭したりしも、既にして阿兄の呵叱せる所となり、止むことを得ず、府君の婚を許し、日を歴ること三日にして合誓の期有り、納采の盛なること一郡を驚動するも、劉氏は黙々として語無く、口を掩ふて啼き、偶日の暮たるに乗じて、門を出で哭す、時に馬聲有りて遠くより至れるは、是仲卿が事を聞きて大に驚き、假を請て府より歸れるの途次なり、劉氏は乃ち其兄に迫られて此に至れることを陳じ、仲卿は劉氏が約を守らざるを嘲り、今は獨り死せんのみと述べたるにより、劉氏もまた只當に黄泉の下に追隨すべき旨を告ぐ、既にして仲卿其家に歸り、母に謁して暗に死を以て之を告げたるを以て、母大に悲み、語るに東隣の佳人を娶るべきを以てしたるも、仲卿は獨り空房中に長嘆し、俄にして劉氏が池水に赴きて死したることを聞や、亦樹に縊れて死せるを、兩家爲に謀りて之を華山の陽に合葬したりといふ、是其詞に就きて知り得

べき事實の大要なり、此の如く多端多緒なるさへ有るに、或は情を寫して微に入り、或は事を叙して精に渉り、或は語を述べて細に至れるなど、聲有り、色有り、千歳の下、長く其人に接するの想有らしむ、其筆力の尋常に超越せるは、固より言を待たず、然れども、今特に此之を記せんと欲する者は、全篇千七百四十五字にして、實に支那の詩中に於て最も長しと稱せらるゝを以てなり。

詩の變遷 (五)

漢末より三國に渡りて、史上の事實紛錯して、名將傑士の輩出せること、人の能く知れる所なり、然れども、文氣の一振して、傳ふるに足るもの多きに至りては、初學或は之を知らず、願うに氣の盛なるときは、言の短長高下、一として宜からざる無きはなければ、既に中に卓犖の材有ること此の如くなれば、發して鏗鏘の韻を爲せる

に恠まざるなり。諸葛亮の未だ草廬を出でざるや、躬ら隴畝の間に耕し、好みて梁父吟を爲せりといふ、其詩に云く、

- 步出齊城門。遙望蕩陰里。里中有三墳。纍纍正相似。
- 問是誰家墓。田疆古冶子。力能排南山。文能絕地紀。
- 一朝被讒言。二桃殺三士。誰能爲此謀。國相齊晏子。

此詩は只晏子が巧に謀りて三士を殺せる事を述べたるまでにて、其譎詐なるを嘆ずるに之れ有れど、亮の忠特英挺あるを以てして、好で之を唱ゆべきものとも思量せられず、故に後人或は之を稱して、亮が好で梁父を吟ずと稱するは、必ずしも但だ此章を指すものにあらず、或は篇秩散落して、唯此れのみ流傳せるものあらんといふ、言或は其眞を得たるに庶幾からんか、然らば則ち、亮が思慕せる所のもの、亮が感慨せる所のものは、亦或は其散落したりし中に在り

たるなるべく、之を讀めば、以て其身は隴畝に臥して、志は天下に在りたるをも、知るに足りしやらん、而して今や僅に此一篇を以て亮の詞才を窺ふのみ、滄海の遺珠、遂に之を拾ふに由無し、惜みても尙ほ餘り有りといふべし。
是より先き、蔡邕一代の詞宗を以て目せられ、其作る所少からず、飲馬長城窟の如き、流傳すること最も廣しとす、善く思婦の情を述べて、纏綿排惻の致を盡を以て、後の推す所となる、其女の蔡琰、亂離に際して、自ら持すること能はず、一たび胡王の爲に虜せられて其婦となり、後曹操の爲に購はれて更に董祀に歸ぎ、胡兒有りて伴ふこと能はず、才有りて命無きを嘆じ、悲憤詩一篇を作れり、其兵の暴なるを叙たるには、「斬截無子遺。尸骸相撐拒。馬前懸男頭。馬後載婦女。長驅西入關。廻路險且阻。還顧邈冥冥。肝脾爲爛腐。」の句有り、胡地に在る時を叙したるには、「處所多霜雪。胡風是夏起。

翩翩吹我衣。肅肅入我耳。感時念父母。哀嘆無終已。有客從外來。聞之常歡喜。迎問其消息。輒復非鄉里。」の句有り、胡兒に別るゝを叙しては「兒前抱我頸。問母欲何之。人言母當去。豈復有遇時。阿母常仁惻。今何更不慈。我尙未成人。奈何不顧思。」の句有り、郷に歸りたるを叙しては「既至家人盡。又復無中外。城郭爲山林。庭宇生荆艾。白骨不知誰。縱橫莫覆蓋。出門無人聲。豺狼嗥且吠。」の句有り、或は深刻の筆を用ゐ、或は悽愴の語を成し、讀む者をして、千歳の下、尙善く一幅の痛涙を澆がしむ、婦人にして之れ有り、鬚眉にして愧死せざるもの幾人ぞ、琰また胡笳十八拍辭有り、又塞外に在て、笳聲に倚りて歌奏せるもの、此詩と表裏して發明すべきもの多し。
而して此際に在りて、一時に挺出し、千古に雄視する者を求んか、魏の曹氏正に其選に應ずべしとす、操が悲壯にして激越なる、丕が

便娟にして婉約なる、植が華麗にして朗暢なる、互に鼎峙して鉅觀を爲す、三人の事、世之を議するもの少からずと雖も、其詩に擅場なるに於ては、萬口曹氏に於て一の違辭無きなり。

對酒當歌。人生幾何。譬如朝露。去日苦多。慨當以慷。

幽思難忘。何以解憂。惟有杜康。青青子衿。悠悠我心。

但爲君故。沈吟至今。呦呦鹿鳴。食野之苹。我有嘉賓。

鼓瑟吹笙。明明如月。何時可掇。憂從中來。不可斷絕。

越陌度阡。枉用相存。契濶談讌。心念舊恩。月明星稀。

烏鵲南飛。繞樹三匝。何枝可依。山不厭高。海不厭深。

周公吐哺。天下歸心。

是曹操の短歌行なり、人生の常無きを嘆じて、時に及びて行樂すべきを説き、烏鵲を以て客子の依る所無きに喩え、遂に以て王者の衆と樂を同くすべきに歸結す、語氣は沈雄にして、意想は博大なり、

樂を横て高く吟せりといふもの、豈徒爾ならんや、此を外にして、龜雖壽中に、「老驥伏櫪。志在千里。烈士暮年。壯心不已」といへるが如き、其老て益々壯にして霸氣は眉宇に溢るるもの、方に行墨間に見はる、世人常に其語を口にして、顧て其操の手に出でしを知らず、僅に赤壁賦に頼りて月明星稀の二句を知り、始て操も亦詩を作れるかど驚く如きもの、固より與に詩を語るに足らざるなり。

曹丕の憂愁を寫すや、善く人の意中を剔抉し出すが如きもの有り、短歌行に親を思ふて「其物如故。其人存」といひ、善哉行に客憂を述べて「湯湯川流。中有行舟。隨波轉蕩。有似客遊」といふ、王者の語に類せずと雖も、尙ほ其本色たるを失はず。

曹植は則ち天下第一石の才、子建其八斗を得たりと稱せらるるもの、十載にして善く文を屬し、居然として大家なり、色にして青紅、音にして宮商、一として具はらざるは無く、一として神に入らざるは

無し、委讀の下、無數の格言は絡繹して奔赴し、殆ど應接に暇あらず、或は「八方各異氣。千里殊風雨。」といひ、或は「生存華屋處。零落歸山丘。」といひ、或は「爲君既不易。爲臣良獨難。」といひ、「利劍不在掌。結交何須多。」といひ、「在貴多忌賤。爲恩誰能博。」といひ、「權家雖愛勝。全國爲令名。」といひ、「丈夫志四海。萬里猶比隣。」といひ、「孤獸走索群。脚草不違食。」といひ、「重陰潤萬物。何懼澤不周。」といひ、「龍欲昇天須浮雲。人之仕進在中人。」といふ、皆洗鍊して之を出せるもの、數莖の鬚を白了せしめざれば、之を得べきものにあらざらむ。

而して植の丕と相善からざるや、植は常に猜嫌疑貳の際に在りて、思を詞篇に托し、怨て誹らず、哀みて傷らず、聖皇篇、吁嗟篇、棄婦篇の如き、皆是なり、丕が七歩の中に詩を作らしめ、成ざれば、之を大法に行はんと言ひたる時、植其聲に應じて云く、

煮豆持作羹。

漉豉以爲汁。

箕在釜中燃。

豆在釜中泣。

本是同根生。

相煎何太急。

是同胞摯朴之情、比体を以て之を發し、善く言ひ難きの事を言ひたるもの、而も妙は工を求ずして工なるに在り、此より前にしては、漢に「一尺布尙可縫。一斗粟尙可舂。兄弟二人不相容」の謠有て、文帝を諷し、此より後にしては、唐に「種瓜黃臺下。瓜熟子離離。一摘使瓜好。再摘使瓜稀。三摘猶爲可。四摘抱蔓歸」の辭有りて。則天后を諷す、此詩と與に同一至性の語なり、之を聞きて感悟せざるもの、固より人にあらず、而して植や遠し。

詩の變遷 (六)

曹植と時を同くせるもの、王粲、陳琳、劉楨、徐幹、應璩の輩、濟々として出で、皆其特色を以て一頭地をいだし、多く遜色有るを見

す、之を名けて建安体といへるは、其時の年號を取りたるなり、之に踵ぐものを阮籍とす、其咏懷數章、怨むが如く、哀むが如く、自ら慰るが如く、獨り憤るが如く、托寄する所も亦略ぼ知べしとす、晋己に魏に代りて張華有り、其詩は兒女の情多く風雲の氣少しといはるれど、勵志詩の如き、流石に淺語無しといふべし、吳の滅ぶるや、陸機洛に入れり、其詩多く排偶を用ゐたるにより、律詩の濫觴といはるれども、短歌行、猛虎行の如き、亦何ぞ才の多きを患ふるに負んや、潘安の悼亡、傅玄の雜詩、兩つながら見るべく、左思の咏史、郭璞の遊仙、共に後人の常に典型と爲す所なり、劉琨其間に偏起して、蒼涼悲壯の語を以て一幟を樹つ、元遠山が「可惜并州劉越石、不教橫槊建安中。」といへるもの、推し得て當れり、蓋し、英雄志を得ずして亂離の間に氣を吐けるもの、重贈盧諶の一章を讀むも亦鷄を聞て起舞せる意態を想像し得べし。

晋に殿する者を陶淵明と爲す、其人物の六朝に冠絶せるは言ふまでも無けれど、異代の感は常に胸に滿ち、時に之を筆墨の裏に托す、獨り其開放朴茂を以て本色の語と爲すに止まらず、本色は即ち四言の停雲の友を思ひ、時運の分に安ずる、善く性情を陶寫して、しかも自然を以て之を出す、唐賢も亦及ぶ能はざる所ならんか、五言は王孟韋柳の手擬心追する所のものにして、長く閑適の祖とせらる、其飲酒の如き、蘇東坡以來、之を追和するもの少からず、中に就いて、

結廬在人境。

而無車馬喧。

問君何能爾。

心遠地自偏。

采菊東籬下。

悠然見南山。

山氣日夕佳。

飛鳥相與還。

此中有真味。

欲辨已忘言。

の一章、歸去來辭と與に流傳すること最も廣し、思ふに其悠然として自適し、造化と物外に逍遙せるが如きもの、其人と爲りにも稱ひ

たるなるべし、荆軻詩は雄邁なるもの、擬輓歌詩は脱略なるものなり。
宋に入て、謝靈運の淵明と雁行するあり、靈運の詩、遊覽を以て勝
れりとす、其人と爲りを尋ぬるに、山水を好み、暇有れば登臨して
左眺右瞻し、爲に山賊と疑れたるに至れりといふ、詩の此体に長せ
るは理の當に然るべき所なり、されば現時の人にして之を評せんに
は、淵明は主觀的にして、靈運は客觀的なりと斷定することなるべ
し、靈運に續きて、顔延之有り、謝惠連有り、鮑昭有り、昭の代東
門行、代出自蒨北門行、行路難の如き、皆古樂府中に傑出せるもの
とす。
齊に謝玄暉有り、「澄江淨如練」の句を以て知られ、心靈にして口慧
なるを以て推さる、今其「大江流日夜」「江路西南永」の諸篇を讀ま
ば、李太白をして一生低首せしめたる所以を知るに足らん。

北周に庾信有り、典故を以て用て痕迹無く、字句を鍊りて秀婉なり、
其孤憤哀戚の感、優に讀者の心を動すに足れり、杜少陵の「清新度
開府。俊逸鮑參軍。」といへるもの、此を指さす、參軍は則ち昭な
り。
梁に無名氏の木蘭詩有り、木蘭は女子の男粧して、爺に代りて遠征
したるもの、燕山の下、黒水の頭、十年にして功成りて歸り、天子
の賞を受て家に至り、此に再び女子の姿に返れるなり、事已に奇に
して詩も亦奇なり、其警挺奇拔なる毫しも時習に染まず、人目之が
爲に快なるを覺ゆ、之を外にして、沈約有り、江淹有り、陳に徐陵
有り、江總有り、皆琢句を以て勝る、聲律漸く嚴にして古趣爲に減
じ、情語多くして徒に綺靡に流れ、詩道日に卑し、遂に近体の創成
を導き、初唐華麗の時代に移り、爰に古今体の大別を確定するに至
る、是を詩道の再大變遷なりとす。

詩の變遷 (七)

詩は唐に至りて大成す、漢魏の高古ある、六朝の綺麗なる、固より風騷を祖述したるものにして、咨嗟咏嘆に適ふもの少からずと雖、其實尙は一格に局して、未だ体制を具備せりとは見べからず、抑々物は單純より複雑に進むが順序なるが故に、詩も亦初は簡單なる口頭の語よりして、漸を以て章を重ね篇を續るに至りしなり、已に進みて詩形の具はるに至れば、其中に自ら一定の音律有るべきこと、亦理の當に然るべき所なるべし、即ち最初は性情の進るまゝに、不規律に歌ひ出したるまでなりしも、次第に自然の調子を發見し、しかも其調子有るもの、善く人の耳に入り、善く人の心を動かし、喜怒哀樂の情も亦自然の調子を假りて、愈々巧に發露することを得るをば認め、字數をも定むることゝもなり、韻學をも究むることゝ

なれるなり、梁の沈約が平上去入の四聲を分ち、聲病を論ずるに及びたるは、たゞ自然の調子を變化の中より搜り出し、以て一定の規律と爲したるに過ぎ、已に音韻を究めたらん上は、之を用ゐて詩と爲さんに、最も善き調子を定めて之に準ずることを望むべし、是に於て、六朝の詩は古体とは言ひ乍ら、漸にして今体に近き平仄を帯び、遂に唐に至れり、唐初乃ち規律を定め、平に宜き處を以て平とし、仄に宜き處を以て仄とし、互に相交りて最良なる音節を奏するに至らしめ、以て詩の正格と見做し、從來の變化多趣なるものをば變格と見做し、正變相待て天下の節奏を具備する所有らしめたり、是に於て、律詩成り絶句成る、後人乃ち從來の五七言長短句に對して、此を今体とし、彼を古体とす、今体の興りたるもの、一面より之を見て、天真の性情を發揮するに不便なりと、極論するもの有らんも知れねど、一面より之を見れば、錯雜より整齊に進みたるも

のなること、必然の數なりといふべし。
唐の時、人として詩人ならぬは無しと稱す、蓋し、今体の此に始て
成れるや、靡然として天下に風行したるもの有るべく、古体として
は、漢魏の或は其極處に至れるもの有るべきも、今体にては、前に
古人無きが故に自在に筆を運ずることを得しなるべく、新奇を好む
と、我より古を作すと、兩情相合して人心を鼓舞したることなるべ
し、之に加ふるに、當時士を取るに詩を以てしたるが故に、仕を求
めんとするもの、勢之に熟せざるべからず、是亦人として詩人なら
ぬは無き一因なるべし、而して其盛なるは、素より今体のみ止ま
らず、古体も亦面目を一新して、來者の規範たらしめたること、言
を待たざる所なり、後に之を分ちて、初唐、盛唐、中唐、晩唐の四
と爲し、時代によりて其人を區つ、人各一体有りて雖、時代は亦時
代の特色有り、之を分つものは徒に搜索に便宜なるが爲のみにはあ

らざるなり。
初唐は六朝の後を承けて、艶にして優柔、華にして富贍なり、陳子
昂の五古、特に建安の風骨を帯びて、異彩を放てりと雖、時の主な
るものは王楊盧駱の一体沈宋の一体なりとす、前者は、七古の長篇
を以て、事を叙し情を叙し、對偶を以て之を粧ひ、蟬聯して下り、
詞の極めて絢爛なるものにして、賦に代へて以て才藻の長を示すも
のなるに外ならずといふ、盧照隣の長安古意、駱賓王の帝京篇等皆
是なり、杜甫之を論じて「不廢黃河萬古流。」といふ、後者は、應制
の長短律詩を以て、麗中に善く新意を具し、莊裏に善く巧思を運す
るものにして、沈佺期と宋之問とが、互に競ふて錦袍を獲んと爲せ
しが如き、以て當時に冠絶したるを知べし、杜審言、李嶠、張說、
張九齡も亦此時代に屬するものとす。
盛唐は開元天寶以下僅少なる時代を指したるに過ぎざれども、玄宗

より肅宗に度りて、初は則ち天下太平、皞々として帝澤を謳ひ、文運の隆盛なること日の升るか如く、後は則ち風塵鴻洞として寧處に暇まあらず、滿目傷心、慘として餘哀有り、是に於てか李白出で、天才の超逸なるは其詩をして飄忽端無からしめ、思索を経ずして筆筆春を成す、其勢や天馬の空を行て羈鞅すべからざるに似たり、以て詩の仙と爲すべし、是に於てか杜甫出で、沈厚の思力、豪勁の筆力、之を玉成するに「辛苦賊中來」を以てし、之を一貫するに「一飯不忘君」を以てし、僞体を別裁して、轉た益々師多く、竟に萬有を籠罩するに至る、以て詩の聖と爲すべし、韓愈が「李杜文章在。光焰萬丈長。」といへるもの、誠に當れり而して李杜の外に立ちて一家を作せるものを王維とす、淵明を學びて其清腹なる處を得、其妙は語言字句の外に在り、孟浩然、儲光義も亦幾と維と軌を齊くし、同く塵表に儵然たり、高適岑參は、骨力老蒼にして才思雄縱なり、

邊塞の詩、感慨の語、共に憂々として金鐵の音を爲もの少からず、李頎の七律、王昌齡の七絶もまた一代に雄視するに愧ぢず。中唐は穩秀清和を以て勝るもの多く、劉長卿より以下大曆十才子の詩の如き、正に其本色の語なりとす、而して、韓愈、白居易、其間に在りて大家と稱し、互に相對峙す、韓は専ら奇傑を尙ひ、學力を以て之を行り、其詩は雄厚博大なり、白は一に平易を主とし、才情を以て之を出し、其詩は清空暢達なり、韓は人人の道ふ能はざる所を言ふが故に、之を和するものは誰ぞやの感有り、白は人人の道んと欲する所を道ふが故に、老嫗も之を解すといふ、韓は孟郊等と聯句を中興して、竅を鑿ち骨を穿ち、以て心目を驚駭せしめ、白は元禎と次韻を創成して、工を争ひ力を闘し、以て興趣を横生せしむ、二家の爲す所各異なれりと雖、異なれるは即ち其地を占め名を成せし所以にして、李杜に繼ぐもの他求するを得ざるなり、韓の門下に

尙ほ張籍、李賀有り、張は王建と與に樂府を以て知られ、李は盧全
と與に鬼体を以て知らる、白と唱和せるものに尙ほ劉禹錫有り、筆
力傑特にして豪を以て目せらる、皆中唐中の異色なり。
晚唐に在ては、李商隱、杜甫を學びて其神を得、空靈跌宕にして、
しかも婉にして多風なり、杜牧、才思横溢して間々縦恣なり、許渾
格を尊びて諷誦すべく、温庭筠、新麗にして悦目せしむるに足る、
皮日休、陸龜蒙、尖削孤峭の一派を以て之に殿し、羅隱、韋莊、以
て五代の過渡たり、しかも愈よ下りて愈よ卑しく、氣力の以て之を
一振するに足るもの無きなり。
顧ふに唐の起るや、詩も亦起り、唐の盛なるや、詩も亦盛んに、唐
の衰ふるや、詩も亦衰へ、詩と時と常に相終始し、其亡ふるや、詩
も亦強弩の末の魯縞を穿つ能はざるに似たり、其互に關係有ること
此の如きは、亦初學の意を注ぐべき處なりとす。

詩の變遷 (八)

宋の初に在りては、西崑体といふもの世に行なはる、西崑体は楊億
劉大年などの一派にて、専ら李商隱を學びて、鮮麗ならんことを力
め、其極にはたゞ好看なる文字のみを剪裁して、以つて能く商隱に
擬したりと爲すに至りたれば、或人戯に商隱に扮して場に上り、身
には錦繡の已に襤褸となれるを着け、我は諸君の爲めに搏拏せられ
て、かくは成り果てたり、と物語れりといふ、一場の好笑話なりと
雖、諷刺の妙は此一派をして顔色無らしめたるに近し。
當時、隱逸にして詩を能くせるものに林逋有り、その江爲の詩中に
就き、僅に二字を改めて、「疎影横斜水清淺。暗香浮動月黃昏。」の一
聯を作りたるは、千古咏梅の絶調として人の善く知る所なり、又魏
野有り、その丞相寇準と與に僧寺に遊びて舊題を見たるに、準の詩

は碧紗を以て之を掩ひたるも、野の詩は塵埃の爲に昏黒となり居たれば、従行の官妓が袖を以て之を拂たるにより、「但得下時將紅袖拂也應勝似碧紗籠」と咏じたること、又一時の美談となせる所なり。歐陽修出で、務めて古に回らしめんとし、其學と識とを以て之を出せるを以て、長篇大作、優に其得力の處を知るに足るべし、しかも其文は韓を學て韓に似ず、是其一家を成す所以なり、其詩は韓を學て韓に似たり、是其一家を成す能はざる所以あり、と稱せらるゝを免れず、備はるを賢者に求めなば、誠に此の如きもの有らんか、修と略ぼ名を齊くせるものを、梅聖俞、蘇舜欽の二人なりとす、聖俞は思を運すること精微なり、舜欽は筆を下すこと豪雋なり、聖俞が春雪の詩は、蠻人をして弓衣に繡せしめ、舜欽の滄浪亭は、後人をして再び建てしむ、蓋し、聖俞が鄭谷に比して梅都官といはれて佛然たりしと、舜欽が漢書を讀みて飲酒の好下物と爲せしとは、其

人を想像せしむるに足るべく、而して、詩は其豪情逸氣を帯びて、即ち能く不朽ならしめたるに外ならず。王安石の詩を論するや、其政を施せると同じく、執拗にして苟も人と合せず、又或は強て反對せるものなしとせず、然れども、其作る所は鍛鍊を以て知られ、漫りに筆を下せるものにあらず、「春風又綠江南岸」の句に十許字の工夫を費したるが如き、又其餘を類推するに餘り有り、其詩の宋に有數なるは、其文の宋に傑出せると、又全く相同じきなり、唐の詩は多く含蓄を主とし、宋の詩は概ね徑露に傾く、顧ふに唐人已に前に在りて一格を爲せるが故に、其牙後の慧を拾はんことは、才人の屑しと爲さるる所なるべし、是に於て、宋人は縦横自在、意の往く處筆も亦隨ふの一境を拓きて、其用墨を新にす、蘇軾は其最も至れるものなり、軾の才は古今に得易からざるの奇にして、其身

世もまた波瀾の盡る無きに遭へり、故に驚くべきもの、哀しむべきもの、嬉笑すべきもの、怒罵すべきもの、口を衝きて出づれば輒ち章を成し、千言萬語、連篇累牘、來るべくして來り、去べくして去り、行く雲の行くが如く、流るゝ水の流るゝが如く、風月江山の網羅せられざる無く、佛魔仙鬼の撮掇せられざる無く、囚繫の艱は以て其骨を磨し、遷謫の厄は以て其神を鍊る、忽にして莊語、忽にして諧語、或ひは議論となり、或は譬喩となり、直叙し、側寫し、長吟短咏し、一として意の如くならぬは無く、胸に記事の珠を藏し、腹に造字の臺を有するものにあらざれば、隻字を著くる能はざるもの、些に凝滯する所を見ず、其筆力の大なる、以て有宋に冠絶すと爲さんに、誰か復た不可を言ふもの有らんや。

視し得べき處にあらず、其詩を學ぶものは、名けて江西派といひ、燈燈相傳えて滅せず、亦蘇黃と並稱せらるゝに愧ぢざるなり、而して、門を閉ぢて句を覓むるの陳無已、客に對して毫を揮ふの秦觀、また先づ指を屈すべきの作家なりとす。

徽宗欽宗、金の爲に携え去られて、北宋此に滅び、王氣南に移り、中原板蕩して互に勝敗有り、此時に當りて、河北の復すべく、二宮の還すべく、而して金の戰ふべきを説くもの、史上其人に乏らず、即ち陸游が死に臨みて、

死去元知萬事空。但悲不見九州同。王師北定中原日。

家祭無忘告乃翁。

と口占したるが如き、忠義の誠、字句に溢れ、千歳の下も尙は肅然として起敬せしむ、彼宗澤が渡河と三度び大呼して死せると、同一感慨なりといへるは良とに以有り、而して游の詩凡そ四萬首、半ば

は時事慷慨の意を寓し、半ばは田園閑適の趣を具す、其宏肆なるもの、固より時に冠たり、其平淡あるものも、亦人を壓するに餘り有り、細は細の妙有り、大は大の妙有り、「天機雲錦用在我。剪裁妙處非刀尺」といへるもの、自ら詩家の三昧を得たりといふべきなり。游と時を同くして、范成大有り、揚萬里有り、俱に思を構ふるは精緻なり、材を取るは卑近なり、今体は概ね古体に勝りて、清新を以て時を風靡す、しかも其巧を弄せんとするの際、往往淺處に着眼して、自ら得たりと爲すが如く、特に萬里の詩の如きは、俗語を用ゆること多くして、詩格爲に高からず、劉克莊は同代の故事を用ゐて新ありとし、方岳は成語を用ひて警なりとす、其餘多くは理に純はらにして趣少く、情に偏して韻に乏しく、油腔滑調の譏を來せるもの、大抵皆然らざるは無きに至れり。蓋し曾て之を論ず、當時詩餘盛に行はれて作家輩出せり、其句は情

を穿ちては微に入り、しかも穩にして秀に、婉麗半綿の中に興趣饒く、讀むものをして神の移るを覺えざらしむ、而して詩は却て沒風趣なるもの、恠むべきに似たり、然ども、詩と詩餘とは、其間自ら分別有りて、語意の通用すべきもの少し、されば詩餘の盛に行れて、嗜好を之に偏するに至りては、有趣の事は多く之を以て咏じ、詩は即ち筆端に舌有るを以て第一義と爲し、其間に鴻溝を劃せしものなるや、亦未だ料るべからず、假りに意有りて之に至らしめざりしとするも、當時の所作を見れば、殆ど之を推測するに十分なりとす。嚴羽が詩話を著はし、周弼が三体詩を編みたるは、正に此弊を矯めんと爲したるに出づ、詩話は神悟を主として、詩には別才有り、學に關するにあらずといひ、妙は神韻縹緲として餘音の悠然として盡さざるに在りとす、三体詩は充實を主として華麗典重の間に雍容寬

厚の体有り、此れ其妙なりといひ、調高くして景の實つるを尙ふ、二説ともに俗樂嘈雜の中に在りて、穿雲裂石の笛聲を聞くの想有りしならんと思はる。

真山民、宋末に名有れども、尙巧を字句の間に炫するに過ぎず、文天祥、雄偉を以て推され、謝翺が亂頭粗服の態、竹如意を撃ちて西臺に慟哭するの状有り、而して宋は亡びたり。

宋の亡びしに先ちて金は滅びたり、時に當りて一人有り、宗社邱墟の感を歌咏に發し、奇偏にして彫刻を絶つと稱せらる、趙翼之を評して、其才は甚だ大ならず、書も亦甚だ多からず、之を賦と遊とに較べんには大小の別有り、されど才の大からず書の多らざる故に、

専ら思の精なる筆の鋭なるに由りて、以て精鍊して之を出す、其廉悍沈摯の處は較や蘇陸に勝れり、といへり、今其車駕遁入歸徳、出京等の七律を讀むに、一字は一淚、一語は一血、聲調の悲壯なる、

殆ど杜甫に逼るもの有り、亦翼の謂ゆる、地の之を爲るものなり、時の之を爲せるものなり、是を元好問と爲す。

詩の變遷 (九)

元の天下を有てるや長からず、故に其作家も多からず、其詩風も亦略ぼ一定して大差無く、宋末の餘弊を救ふて、輕揚にして穢麗なるを以て勝りたるに似たり、奔放飛騰の致無きか故に、長江大河の規模無しと雖、山間の小溪、潺々たり淙々たり、以て耳を澄し心を怡

ばしむるが如きは、則ち其特色なりと知るべし。趙孟頫は宋の王孫を以て元に仕ふ、其出身の賤しからざりしは、其詩をして儒雅風流ならしめ、迫らず窘ましめず、書法の妙と輿に傳へられて、元詩に冠するに足らしむ、しかも元の盛時は、虞揚范掲の四家を以て最とす、虞の名は集、揚の名は載、范の名は桴、掲

名は侯斯、集は法度の謹嚴なると、詞章の典貴なるを以て知られ、載は曠達宏朗なるを以て稱せられ、惇は天骨の開張せるを以て推され、侯斯は妍秀婉雅にして秀色の餐すべきを以て目せらる、道は百ち驪を馳せ、以て一時を粧點せり、集會て月旦して謂らく、載は百戦せるの健夫の如く、惇は唐人の晋帖を臨するが如く、侯斯は美女の花を簪すが如く、已れは漢廷の老吏の如しと、侯斯之が爲に不平なりしと雖、亦以て四家の趨向を知るに足るべし、而して集は實に其中に擢んぶ。
薩天錫は四家に次て清妍を以て時に鳴り、倪瓚は枯淡を以て自ら喜び、而して楊維禎に至りて元は終る、維禎は長吉商隱の二季より出で、樂府と竹枝とを以て一時に鳴る、其色は五采の相映するなり、其聲は八音の相和するなり、魂を蕩かし魄を動すの語、靡々として聽に入り、爲に文妖の譏に詩は亦然りといはしむるに至しと雖、其

才情の横逸せる、洵とに得易からざるなり、而して劉基は早く已に蒼々莽々の致を以て一方に偏起せり。
基は明の開國名臣なり、其胸中に蘊蓄する所は、固より蟲雕獺祭する輩の比に非ず、故に其作る所も亦、古にして高、直にして雅、絶て鏤金錯采の習無し、纖細煩縟の弊を矯むるもの、宜しく斯の如くならざるべからず、創業の際、方に此一人無き能はざるあり。
高啓は時の巨擘なり、李東陽は云く、國初に高楊張徐と稱せり、季廸の才力聲調は、三人に過ぐることを遠き甚し、百餘年來、亦未だ卓然として之に過ぐるもの有るを見ずと、趙翼は云く、青邱の才氣は超邁なり、音節は響亮なり、唐人を宗派として自ら新意を出し、一たび筆に涉れば即ち博大昌明の氣象有り、亦有明一代の文運に關す、論者推して開國詩人の第一と爲す、信とに虚からざるなりと、東陽は明の大家、翼は清の大家、二大家の啓を品すること此の如き

を見れば、啓の啓たる所以のものは、多言を要せずして之を知ることを得べし、所謂季廸は啓の字にして、青邱は啓の號なり、楊基の適麗なる、張羽の雄放なる、徐賁の清潤なる、與に啓の後に追隨すべく、袁凱もまた白燕吟を以て知らる。
李東陽、昭代に生れ、仕へて大學士に至る、某天稟の資を驅りて休明の運を鼓吹するや、宮を含み、商を咀ひ、春容として大雅なり、朗潤にして清澈なり、其擬古樂府は則ち古來の史乘に就きて、忠孝義烈及び異辭逸聞の、以て歌咏すべきものを取り、之を發洩するに長短句を以てす、後人稱して云く、奇旨を創造し、名語を疊出す、縦ひ未だ之を管絃に被らしむべからざるも、自からはれ天地間一種の文字なりと、宜あるかな、後の範を之に執るもの、多きや。
李夢陽の起るに及びて、務めて雄渾ならしめ、偉麗ならしめ、以て格を正しくし、以て調を高くせんとし、唐以後の書を讀まず、唐以後

の事を使はずと稱するに至る、しかも爽氣の能く殊倫なる有り、何景明、之と對壘して下らば、初唐に胚胎して、才藻は豐贍なり、文辭は秀麗なり、終に「俊逸終憐何大復。粗豪不解李空同」の語有るに至る、大復は即ち景明にして、空同は即ち夢陽なり、而して二家と鼎立し、才は之に及ばざるも、尙は偏師を以て之を攻めんとする者を徐禎卿と爲す。李何が復古を唱へてより、漸くにして天下之に準する有り、其極たる、英雄人を欺くの語を爲し、高く自から標置し、又互に相標榜して以て其詩説を行ふに至れり、七才子是れなり、七才子は李攀龍、王世貞、謝榛、梁有譽、宗臣、徐中行、吳國倫をいふ、攀龍の七律、句意は重複すと雖、王維李頎の軌を奉じ、世貞の樂府、正奇相參して、自から機軸を出す、棒の名は二子の前に在りて、其論また二子の先驅を爲す、今体を觀るべしとす、有譽の文選に於る、臣の李白に於る、常に私淑する所たり、中行の藹々

たる吉士、國倫の眉壽達生、詩よく其人に稱ふ、要するに、文を秦漢以上と定むるに例して、詩は必ず盛唐以前なりとす、されど其學びて盛唐以上と爲す所のもの、多くは其面貌を襲ふに止りて、其神明に及ばず、其文字を擬するに過ぎずして、其風格に至らず、甚しきは其語句を剝脱して自家の材料と爲すもの有り、畢竟するに是れ優孟の衣冠を著けたると一般なれども、攀龍の著す所の古今詩刪、世貞が著す所の四部稿兩ながら傳りて朽ちず、殘香剩馥今も尙は存するもの有り、亦盛なりといふべし。
七子に先だちて楊慎有り、稍や後れて徐渭有り、慎は齊梁に沈酣して、淵博娟麗の語を作し、渭は李賀を具体して幽峭奇僻の句を造くる、其繁重に流れ、輿僻に陥るものは其弊なるのみ。
而して七子の弊を看破して之に反抗せるものも亦少からず、しかも常に其志を達すること能はざりしが、袁宗道宏道の兄弟出づるに及

び、始て一轉境を作り、宗道は白蘇齋を構えて居易と軾とを規矩とし、宏道更に性靈を説き、唐人には唐人の詩有り、宋人には宋人の詩有り、皆剽窃より出でたるものに非ずとなす、然れども、其作る所、ともに俳諧調笑のもの多く、徒に鄙俚に傾きて識者は之れを病む、鍾惺、譚元春、之に次ぎ、一字一句の末よりして、冷僻玄微なるものを標擧し、以て至處を得たりとなし、肝を鏤し腎を鉤し、徒らに蚓竅蠅鳴を爲して、自ら喜び、天下また之に従ふ、當時已に目して亡國の音と爲すもの有り、錢謙益早く之を隻眼に覷破し、復たび之を正に反さんとし、國亡びて却て清詩の祖たり、故に有明三百年の文運を収束して、瑰麗以て世を蔽ふに足るものを求めば、それたゞ陳子龍有るのみ。

詩の變遷 (十)

錢謙益已に清の詩に首として、其學は該博なり、其句は雄偉なり、素とより唐宋を打して一九と爲すに在りて、しかも大蘇に得たるもの多く、以て明代偽唐の習を破らんとしたるもの、力めたりといふべし、奈にせん、其人の取るに足らざるによりて、從て其詩を累するものも亦少からざるを、吳偉業もまた已に明時に於て名を成せるもの、其古詩は元白記事の体より出で、參するに初唐の体を以し、豐瞻の詞、蒼涼の致、興亡の感を繋けて其中に在り、龔鼎孳の才人に超えて千言立どころに成ると稱すれど、江左三大家の目に在りて、錢吳と並び立たんこと、難しといふべし。

南施北宋なるものは、施閏章、宋琬なり、閏章は温々たる儒雅を以て居り、作る所は穩にして秀なり、清にして幽なり、五律は最も神

に入て、其優なるものは以て古詩十九首にも匹すべしと稱せられ、其聯を抄して摘句圖と爲すもの有るに至れり、琬は豪氣の蔽ふべからざるもの有り、晚唐を師として、纖靡に流れず、玄微に陥らず、其蒼莽の處、また一代を壓するに足れりとす。

王士禎出でて、居然として大家なり、其詩は神韻を主とす、神韻は所謂一字を着けずして自づから風流を獲るものにして、句中に斷語を下さずして讀む者早く已に其境に入るなり、若し聊にても工夫を加えて自然を失ひたらんには、既に第二義に落たるものとして、取らざるなり、故に絶句最も神品にして唐賢の三昧を得たりとす、然れども其詩或は愛好を以て譏らる、愛好は百鍊千磨して邊幅を修するに近き嫌ひ有るを指したるものにして、以て朱彝尊の貪多に對せられたるなり、彝尊の學は窺はざる所なく、才は能くせざる所なく、或は杜韓を學ひて排憂跌宕たるもの、或は皮陸を學びて孤冷

拗峭なるもの、皆是有り、而して其學の才の、寫せば必ず盡し、描
けば必ず至れる、篇を連ぬ牘を累ね、忽ちにして百言、忽ちにして
千語、是其多きを貪るの譏有る所以なり。
王を譏り朱を譏りて、自から地步を占めたるものを趙執信とぞ、其
人已に傲然として同列に容れられず、詩もまた人の唾餘を拾はず、
查慎行、之に繼ぎ、専ら蘇陸を稱えて、一意に白描し、滿腹の圖書
は徒らに以て其才を炫耀するに資せしめず、康熙の詩變、是に至り
て極まり、以て乾隆時代の詩風を導く、而して後の清初の詩を論ず
るものは、錢吳王朱の四家を推し、或は又王朱に加ふるに施朱と趙
查とを以てし、名けて六家といふ、其錢吳を除けるは、蓋し、二臣
傳中の人物なればなり。
乾隆の三家、一を袁枚と爲す、枚の天才の卓然たる、弱冠にして博
學鴻詞に薦められたるに見て、之を知るべし、其官を罷めて金陵に

居り、無位の衡文者を以て期するに及び、主とする所は性靈なり、
人人の性情にして發揮せば足れりと爲すが故に、人人皆詩人として
之に見ゆるを得、天下の爲に之に靡きたるは理なしとせず、一を蔣
士詮と爲す、士詮は史筆を以て自ら任ず、其傳奇諸篇の勸懲を旨と
したるに論無く、序事の詩が揚維楨の樂府より出でて、更に其規模
を大にし、聲調を壯にし、忠孝義烈の男女をして、鬚眉面目の躍如
たるを覺えしむ、一を趙翼と爲す、翼また史に精しきもの、故に事
有れば詩有り、詩有れば典有り、而して其典故は皆正史より出でた
る者にして、旁搜博採せるものにあらず、故に間々諧謔に涉れるも
の有るも、多く雅を傷るに至らざるは、亦此根抵有るに由るなり。
三家の先輩として知られたるものに沈德潛有り、德潛は枚と同年の
進士にして、其趨向は全く相反し、此は臺閣縉紳の風を期し、彼は
江湖隱逸の趣を期し、此は嚴に裁して僞体を斥けんとし、彼は博く

取りて長處を擧んとし、此は則を雅頌に取り、彼は範を國風に得、相異なること此の如くにして相譲らず、枚の隨園詩話、德潜の國朝詩別裁、各後進を導きて其圈套に入らしむ、德潜に次ぎて枚に抗せるものに王昶有り、昶は德潜の門に出で、韓蘇に私淑して枚の壘に對せんとし、湖海詩傳を著はすや、亦以て詩話を排するに供せしもの無きにあらざるなり。

乾隆の末嘉慶の初に至りて、黄景仁の如き有り、吳錫麒の如き有り、張問陶の如き、陳文述の如き、郭麐の如き有り、樂鈞、吳嵩梁の如き有り、皆一時に名有りと雖、之を前時の作家に比するに、氣格較や減するもの有り、たゞ其細緻なる、縝麗なる、飄宕なる、流易なる、細かに之を検すれば、一竹一石、尙は能く庭園の觀を添ゆるにも似たらんか。

道光嘉慶に至り、同治光緒に至り、愈よ下りて愈よ卑しく、獨り高

調の以て古人に追隨すべきものなきのみならず、遠韻の一代に超出するもの、亦少れにして、多くは皆一句の美、一字の奇、以て儕輩に誇るに過ぎず、其性靈を主とするものは、農歌村笛、徒らに耳に喧しく、話の如く、諺の如く、盲詞の如きもの、滔滔として是なり、假りに之を舶載する所の書に乏しくして、盡く其名を知ること能はざるに因るとするも、抑また何を其人無きの甚しきや。

因りて思ふに、支那の習として、國の興るや、詩以て盛んに、國の將に亡びんとするや、詩以て衰ふ、今の清朝なるもの、遽かに亡ぶべきや否やは、余の知る所にあらざれども、其詩の衰ふること前に言ふ所の如きは、其國久しく乱れて、其氣已に餒ゆるに、是れ基づかずんばならず、故に單に之を詩道よりして論せんには、今にして國の興るもの有るに非ざれば、其頹廢すること將に底止する處なきに至らんとす、しかも興國の亡びんことは、余の希ふ所にあらず、

乃ち其詩の弊を矯め、其詩の廢を起し、以て狂瀾を既倒に廻さんと
するもの、果して之を何如にして可ならんか、余將に答えて云はん
とす、他亦し、邦人宜しく進みて之に任すべきのみと、少年諸子た
るもの、旃を勉めずして可ならんや。

詩話は乙未中に草せるものにして、續篇は丙申中に稿せるものな
り、前後文体の一ならざるは、同時に筆を執らざりし爲なるが上
に、聊か考ふる所有りて、中ごろより改たるに因れり、今皆其舊
の儘にす、校し了りて自ら五絶句を題して云く、

畢竟古賢糟粕餘。霏霏談屑竟何如。烹文炊字閑
生計。我是人間一蠹魚。
漢魏六朝唐宋後。涵今茹古各成家。不離敦厚温
柔旨。三百篇詩正以葩。

偶然咏嘆出嗟咨。阿堵傳神自主持。十二萬年纔
一悟。性情以外本無詩。

李賀新詩抵鬼工。高軒一過舊神童。東京才子知

多少。不見文章動鉅公。

詩瘦平生獨自憐。墨香散入藥爐烟。春風怕被梅

花笑。破壁寒燈又一年。

丙申臘月下浣

寧齋主人附識

續少年詩話終

少年詩話附錄

寧齋主人

詩人の徳義

若し詩人を雅人といひて、俗人と區別するを得ば、詩人は已が品格を維持する爲には、俗人に立ち勝りて、徳義に心がくる事勿論なるべし、蓋し、其言ふ所、其考ふる所、風趣韻致の事に關するが故に、其心根にして卑しむべければ、其詩の品格を高むる事も得べきやうなればなり。

詩人の徳義に關して、剽竊踏襲するものを筆誅するは、無用の事に非ざるべし、獨無用の事にあらざるのみならず、今や其必要に迫らるゝもの有るなり。

剽竊踏襲の弊、固より言を待たず、王世貞之を目して詩の大病ありといへり、余は直ちに之を詩人の敗徳なりと言はんはんとす、而して剽竊の目、釋浩然分ちて之を三となす、一を偷語といふ、是全然前人の語を踏襲し、中或は二三の字面を改めて我詩となせる者にして、詩式之を例するに陳後主が「日月光天徳」を以てす、此句傅長虞が「日月光太清」の語を偷み來り、上三字全く同く、下二字字異にして義同じ、二を偷意といふ、是其語を襲ふにあらざるも尙は前人の意思をば其中に移し來る者にして、詩式之を例するに沈佺期が「小池殘暑退。高樹早涼歸。」を以てす其句全く柳渾が「太液滄波起。長楊高樹秋。」の句より來りて、意相同じ、三を偷勢といふ、其語を偷み、其意を竊むに非ざるも、尙其調子の太だ相似たるものにして、詩式之を例するに、王昌齡が「手携雙鯉魚。目送千里雁。悟彼飛有適。嗟此罹憂患。」を以てす、其句全く嵇康が「目送歸鴻。手揮五絃。」

俯仰自得。游心太玄。の句より來り、語勢全く相似たり、三者皆前人を偷み來れるに相違無しと雖も、其中自づから次第有り、浩然之を判して、偷勢は才巧みに意精しく、若し痕迹無くんば、吾亦賞俊して其網を漏るゝに任せんといひ、偷意は則ち事に於て差支無きが如きも、情に於て原し難しといひ、偷語に至りては、斥けて鈍賊とあし、弱手蕪才をして、公けに劫掠を行はしむる者なりとなし、刑を逃るゝの處なしといふ。
要するに浩然の言ふ所は、三者共に一句一句の上につき、此の如き病處有るを指摘し來りたるものなれども、其中の分寸は、後人の熟知せざる可らざる者有り、今余が鼓を鳴らして之を攻めんと欲する者は、實に詩壇の鈍賊たる偷語に外ならざるなり。
然れども、豫じめ爰に注意し置かねばならぬもの有り、余が今言はんとする處は、重もに今賦律絶を限りて立論せるものなり、古人い

ふ、李滄溟の詩名一代に冠絶したるも、祇だ樂府の模擬割裂せるを以て、後人の詆毀を生じたり、思ふに詩は文と同からず、文は長きが故に、語句の雷同するもの有るも少なければ、尙ほ相覺へず、詩句は止だ數字接合するも、尙ほ譏を蒙る、况んや其顯竊するに於てをやと、而して同じく詩に在りても、樂府若しくは古詩の如き長篇にありては、文字の多きだけに、中或は一二の剽竊有るも、目立ずして濟むも有べし、此點大に文章と其異なるを見ず、文字の少きは少きだけに、殊更だちて注意を惹くは亦免れぬ數なるべし、これ今剽竊踏襲を論ずるに當りて、重もに今賦に就て檢する者有らんとする所以なり、初學の古賦を學ぶと少ふして、今賦を作ると多き今日に在りては、却て亦無益の勞を省く者有らんか。
(一)「疎雪未消双鳳闕。新春先入五侯家。」は晚唐張蠙の句なり、明の劉績疎に易ゆるに霽を以てし、新春に易ゆるに春風を以てし、把て

我作と爲して曰く、「霽雪未消双鳳闕。春風先入五侯家。」此を以て詩名を得たり、朱竹垞いふ、張の此聯は絶妙なれども、劉の詩の首尾相當るに及ばずと、其意劉の詩工絶なるが故に、古人を踏襲するも差支無しと爲すもの、如し、然れども、詩は詩なり、句は句なり、句の妙を以て詩の拙を蔽ふ能はざると同時に、詩の妙を以て句の拙をも蔽ふ能はざるは、古來皆然り、假りに張の詩は劉の詩に及ばずとするも、一聯の妙自から在り、劉の詩妙なるも、一聯の妙は張より借りたるのみ、之をしも許さんか、余は浩然の罪する所とならんとを恐るるなり、余頃る近人の詩を讀み、「楓樹夜猿悲欲斷。女蘿山鬼語相和。」の悽艶なるが如き、「天各一方分骨肉。地無半畝種蔬瓜。」の眞摯なるが如き、共に及び易からざる者なるを知る、しかも之を李義山の「楓樹夜猿愁自斷。女蘿山鬼語相邀。」に比し、嚴海珊の「天各一方分弟妹。地無半畝與兒孫。」と比して、俱に愧づる所無かるべ

きかを考へ、更に其詩に於て、前人に超越するかを考へて、竹垞の人を誤まる事多きを嘆息せずんばあらず、更に石埭先生の「講來實學功彌積。移到治民才便優。」星秋先生の「金蘭有簿名空記。雞黍無期夢久牽。」の句が、二三を改めて、諸先生の在時、已に作者を更へて、公然世に出るあるを見る毎に、余は轉た竹垞が地下に在りて、好方便を後人に興へたるを悔ゆる有るべきを想ふなり。
(二) 竹垞又曰く、「竹影横斜水清淺。桂香浮動月黃昏。」は江爲の詩に非ずや、林逋其二字を更めて、竟に千古の名句を爲す、所謂一字の師にして、活剝生香する者と別有りど、二字とは何ぞ、竹の疎となり、桂の暗と爲り、而して詩も梅花を咏する者となりたるにて、人復た其原作有るを知らず、句は偷み來るも、意は清新別致なり、逋の手腕を以て偶々一度び之を爲す、或は不可なかるべし、後人漫に之に托して、古名句を採り、一二語を易へて我詩となし、揚々自

得するもの有らば、其弊や謂ふ可からざるもの有らん、余は其偷語者なるを斷言せんのみ、曾て清國公使の宴を紅葉館に張り、本邦諸名士を會せしもの有り、席上吟じて曰く、「三島風烟盃底合。兩京人物座中收。」と、衆或は賛して絶妙好辭となせる者有り、獨り知す、王漁洋二百年前に於て、之に似たるの句を唱へしを、曰く「三楚風濤盃底合。九江雲物坐中收。」と、蓋し其金山に上るや、願眄自から壯なりとして、此句を爲せるなり、今其三楚を改めて三島となして、之を本邦に比し、九江を改めて兩京と爲し、東西二京に比し、以爲らく、句の形は相似たるも、句の意は大に異ると、余其果して一字の師と稱す可きものなるや否やを知らず、只當時狂躰の填詞を以て之を嘲りたる、「願見渠所作。漁洋貌似才可驚。」の句有るのみ、之に比較しては、某氏の人の琉球に之を送るとて、陸放翁の「寺樓鐘鼓催昏曉。墟落雲烟自古今。」を學びて、「中山鐘鼓空朝暮。南海波濤

自古今」とせられたるこそ、林逋が江爲を改めたるの精神に近しと思ふなれ。
(三) 漁洋は直ちに林逋の此句をもて、踏襲の甚しき者なりとせり、句の上より言へば全く夫に相違無し、されど漁洋も亦踏襲の弊有ると、槐南先生も亦已に之を言ひたまへり、曰く「懷人江上楓初落。臥病空堂雨易成。」は、李滄溟の「臥病山中生桂樹。懷人江上落梅花。」より出で、「萬古窮荒生馬角。幾人樂府唱刀環。」は朱竹垞の「龍庭生馬角。寒窰視刀環。」より出でしものなりといふ、「他日與君論劍術。要離塚畔買青山。」に至りては、純然錢牧齋の「老大不堪論劍術。要離塚畔有青山。」を踏襲したるもの、初學者尙ほ之を知るに餘り有るべし、牧齋は漁洋の先輩にして、一度は其調を通じたる者、竹垞は殆ど其後輩なり、而して漁洋の詩に於ける、此の如き者有り、然れども現時の詩人、善く自ら省みて全く疚しからざる者幾何か有る、

時人爲に色作せりといふ、今は則ち斷錦零繡をつぎはぎして場に上る、事異にして醜則ち相似たり、又一奇觀にわらずや。
(六) 然れども、其平生古今人の詩を細嚼し、全く我精神と同化するに至りては、我詩を考ふるに當りて、偶然吟じ出して、前人の句たるを覺へざる事有り、是固より咎むる能はざるの事なれども、其全く我に先じて其句を哦し去る者有るを悟るの日は、我詩を削除するか、若しくは更改するの日たるを覺悟せざる可からず、其際に當りて、今更未練にも、暗合を以て責を逃げんとする者有るは、尙ほ踏襲の嫌ひ有るを免れず、余が事を以て例するは失躰の嫌なきに有ざれど、何がなしに自白す可し、余曾て「月前箏笛空流水。霜後關山入夕陽」の句を得。槐南先生前句を改めて、「月中簫鼓隨流水」となし、先生と余と共に、其據る所有るを覺へざりしなり、後詩牌を作るに及びて、唐詩を檢し、始めて李益の「漢宮簫鼓空流水。魏國山

河半夕陽」に似たるの甚しきを知り、大に驚き、前句を改めて、「月前鳥鵲迷寒樹」となせり、句は固より及ばざると遠き甚だしきも、我心乃ち降るを覺へたり、世間此の如きの類、定めて多からん、今特に一例を擧げん、客年の東京新報紙上、社員某氏の紀行を載す、間々詩有り、中に「南輿由來養蠶國。無家無婦不繅絲」の句有るを見る、之を我先考の毛山探勝錄に載する所の「上野真成蠶子國。無村無戸不繅絲」の句に比して、相似たる者有るを覺ゆ、是れ全く偶然の結果に過ぎざるべければ、余は某氏のなるべく改案有らん事を願はざるを得ず。
(七) 前人の句を踏襲するの恐れ有る者は、作らざるに勝れるに如かず、前年「胸中閑日月。皮裏小陽秋」の一聯を得て、古句なるを疑ひ、終に詩を成す、頃る岩溪裳川君と池田綠所君を訪ふ、席上嘗て裳川君に贈たる「筆有千古不荷下」の句を想起し、更に「筆下有千

古。眼中無一人。の一聯を得たれど、其有そふなる句なるを疑ひ、
 裳川君に正す、君曰く、有りそふなりと、綠所君亦曰く、有りそふ
 なりと、後槐南先生と光妙寺水賓君を訪ふ、晤次之に及ぶ、先生君
 と共に有りそふなりといふ、琴莊君來る、亦曰く有りそふなりと、
 遂に筆を擱して詩となさず、然れども眞に何人に其句有りしやを記
 臆せざるなり、俚諺に云く、さはらぬ神に祟り無しと、踏襲の譏を
 避けんとして、此の如きこと、亦諸家の常に有る所なるべし。
 (八) さりながら、語句相類して必ずしも踏襲と爲すべからざる者無
 きにわらず、古事を用る場合の如き、勢ひ相似たるもの出るを免れ
 ず、彼牧齋が宋景濂を學びて獨角麟を用ひ、漁洋が牧齋を學びて要
 離塚畔を用ひたるが如き、故意に剽竊したるものに非る以上は、余
 は踏襲と斷言するを躊躇せんとす、彼郭定襄が「豈有耽人羊叔子」
 可憐憂國買長沙」といひたるの後、王文簡が「豈有耽人羊叔子」會

無悔過竇連波」といひたるが如き、出句は同一古語を使ひたるの結
 果、已むを得ざるものなりと思はる。
 (九) 一二字を以て前詩を翻へす者有り、是れ固より踏襲ならず、例
 せば、春濤翁の「雨衫風笠度函關」を活用して「雨衫風笠又函關」
 となさば、主意一變、精彩大に生ず、假令他人之作れりとする
 も、踏襲の嫌ひ無きこと勿論なるべしと思はる。
 (十) 時有りては、古人の句中、其眼前の景物口頭の語相類似して嫌
 となさざる者有り、「日長睡起無情思」閑看兒童捉柳花」の如き、「有
 約不來過夜半」閑敲棋子落燈花」の如き、其精彩の多くは後句に有
 りて、前句は有りふれたる心意氣なりといふをも得可し、今偶然興
 に觸れて前者に似たるの句を爲すも、其原作に傷つけざる以上は、
 剽竊として之を尤むる程の事なかるべしと思はる。
 (十一) 要するに此の如き例外有にも係はらず、余は、律に於ては對

句の兩々相犯し、絶に於ては轉結の多く相似たるは、特に嫌惡すべき者なるを思ふ、其全篇の精彩、多く是によりて發するものなればなり。

(十二) 終りに臨みて言ふべき者有り、書を読みて一生字を得、一新語を得、來歴の有るをば驅りて詩に入る、其字面は其人の作り出したるに非ざるも、創めて之を運用したるの才は、其人を推さざるを得ず、他人則ち其清新なるを見て奇貨居くべしと爲し、其出處有るを楯として、之を濫用する者有らば何如、余は其徳義心無きを見るのみ、然れども、余は今の世に於て、漁洋が雨絲風片の文字を牡丹亭より得來り、始て之を詩にしたるの際、牡丹亭は漁洋の特有にあらずと言ひたげなる者の、此世に少なからぬを見る、余は此の如き場合に於ては、尙ほ偷語の例に入るべき者と信するなり。余が偷語に於ける見解、此の如く、今の詩を作る人に反省を乞はん

と欲する者、此の如し、而して更に偷句なる名目有るに至りては、筆を改めて之を正さざるを得ざるなり。

一 余が郷に在る時、小濱に遊び、中村仰山君を訪ふ、君曰はく、一奇話有り、請ふ之を聽け、前日長崎の詩人某來る、余諸親を會して清集一番、席上分韻して詩を賦す、某苦吟するもの半日、漸く一詩を成す。中に「雨添山氣色。風借水精神。」の一聯有り、和平の中自づから雋逸なる所有り、滿坐驚倒す、某固と書名有り、余書箋を劈して大筆揮灑せんを乞ふ、某顧みて他を言ひ、遂に管を擲らず、歸るに臨み、再案を約して稿を携へ去り、衆皆之を異とす、偶々唐詩金粉を見しに、泉部に此聯有り、白居易の作る所に係る、因て某が席上此書を繙閱すると久しかりしを思ひ、其一場の滑稽劇を演じたるの理由を悟れりと、余思はず苦笑して曰く、一場の賞賛を博せんと欲して、廉耻を破る、彼其頭上の白髮に愧づるなからんや、宜

べなり中自ら責め、箋を汚すに忍びず、稿を存するに忍びず、倉皇として去りたるやと。

(二) 獨り邦人を然りと爲ざるなり、客年秋日、國會文苑、清人章某の秋日排悶雜咏を載す、綬山衣洲君曰く、天才俊逸なり、詩筆婉麗なりと、其中に就き、最も出色にして人耳に入る者を求むれば、則ち「早識愁爲無底物。不堪秋是可憐聲。」の一聯なりとす、而して此句は全く蔣藏園の傑作として流傳するの語にして、一字を違へず、更に其全詩を把りて之を見るに、蔣に及ぶる霄壤雷ならず、章某なるもの徒らに厚顔の嘲を海外に貽す、天才の俊逸有り、詩筆の婉麗有りと雖も、將た何の益か有らん。

(三) 而して裳川君の言ふ所によれば、新聞紙上、時に其同人の句有りて、其作者を異にし、現に君の兩三聯は、他人の假る所となりたるもの有りといふ、余は君を信ずると共に、此言をも信せんとはす、

嗚呼誰か偷句の罪を負ふものなるぞ。

(四) 然れども、故らに古句を用ひて語勢を強め、或は借りて自況するもの有るは、固より剽竊なるものに非らず、多く噲炙せるものは必ずしも其注するを要せず、其或は之を注して以て相分つは、其篤實なるを見る、况んや句中自から之を記すものをや、古人云ふ、問々舊句の妙に新裁に合せるは已むを得ずして用ゆ、李太白の「解道澄江淨如練。令人却憶謝玄暉。」といへるが如き、澄江の五字全く玄暉の句なり、其句を用ひて其人を没せず、之を明取の法といふ、之を剽竊するに非ざるなりと、是れ固より偷句と同時に論すべきにあらず。

偷句の徳義を傷る、大なると固よりなり、然れども尙ほ參するに我句を以てす、罪尙輕し、一意偷詩するものに至りては、我亦之を筆にするに忍びざるなり、忍びて之を筆にするものは、詩人の徳義地

を拂ふに至るを恐るればなり。
(一) 我友某氏の幼時下總に在るや、贄を某氏に執り、一日數十首の詩を書して正を乞ひ、中に「澧水橋西小路斜。日高猶未到君家。村園門巷多相似。處處春風枳殼花。」の詩を加へ、故らに水橋を改めて其地の橋名を以てしたりしに、其師此稿を批して、此詩に至り、特に一字を更めず、圈して之を返せるが故に、某氏はいたく師の眼有るを感じ、されど、澧水橋の詩、千古に流傳して、少しく唐詩を讀む者乃ち之を知らざる者なし、之を以て師の眼を測らんとせるは、流石に兒戲たるを免れず、其師の直筆、其心得違なるを誡め、古詩を偷む可らずと喝住せざりしは、兒戲なりと知りて之を顧みざりしならんも、余は弟子によりては、此寛大の爲に、更に偷詩の道を開かんことを恐れて、其屠刀を一下するの適當なるを思へり、噫習は性となる、兒戲豈に何日までも兒戲ならんや。

(二) 國會曩きに清客陳某の詩を録す、曰く、

清流濯足圖

蕭娘門戶舊相望。生小相憐各自傷。書爲頻開愁粉脫。
衣禁多浣更生香。有情皓月憐孤影。無賴閑花笑獨忙。
斜倚銀牀春睡足。手拋蟬翼助新粧。買得我拚珠十斗。
慵梳慣愛髮鬢鬢。默默含情喚不膺。九轉柔腸對暗燈。
賺來誰費豆三升。千行愁淚吟團扇。人間寫照恐難勝。
會作容華宮內侍。人間寫照恐難勝。
再たび三たび吟じ了りて、兩當軒集を繕ば、綺懷の第五首に曰く、
蟲娘門戶舊相望。生小相憐各自傷。書爲頻開愁粉脫。
衣經多浣更生香。綠珠往日酬無價。碧玉於今抱有郎。
絶憶水晶簾下立。手抛蟬翼助新粧。
而して其十六首に「有情皓月憐孤影。無賴閑花照獨眠。」の一聯有り、

其十一首に曰く、

慵梳常是髮鬢髻。背立雙鬟喚不膺。買得我拚珠十斛。
賺來誰費豆三升。怕歌團扇難終曲。但脫青衣便上昇。

彼を以て此に照す、其剽竊せる、一句一聯に止まらず、其基礎を奪ひ來りて、申譯までに其若干字を易ゆるのみ、巧妙なる照獨眠の三字を笑獨忙となして押韻したるが如き、つぎはぎの極、其意味の何たるを知るによしなし、宜べなり、其詩の依然として綺懷にして清流濯足圖と見べきなきや。陳某曾て詩を論して「詩如箋與疏。字字有來歷。其中無真氣。不能一錢值。」といひ、「須知古人詩。一字非強爲。不讀万卷書。不許千秋知。皮毛雖可飾。凡骨不可移。」といふ、字字來歷有るもの、此の如きか、一字強爲に非ざるもの、此の如きか、余は他人の詩を借り來り皮毛を飾るも、真氣無くんば直ちに凡

骨を露はすに至るを教へんのみ、それ只此の如きは、語を偷むといはんよりは、句を偷むと言はんよりは、寧ろ詩を偷むといふの勝れるに如かざるを思ふて、暫く此處に論及するのみ。

(三) 然れども、是尙は古人の詩を抄録せるもの、今人の詩を剽竊し來るに至りては、先輩も亦知らずして、或は之を批し之を評す、不徳義の者、其爲す所を縦にするを得る者之による、之を陳其年の語に徴せんに、

有僧以詩名、遊陽羨、投詩一卷、乞序、皆出吾友紺公所著、不覺失笑、調偷勢木蘭花一闋、以戲之、後同史子雲臣、過吳門、訪公梅隱、述其故、一座闐然、公曰、是無足異、曾有僧、假余詩、謁王阮亭先生、中有乱松殘雪寺、孤磬夕陽山句、先生嘆賞不已、贈詩曰、愛公殘雪句、何減碧雲篇、列漁洋集中、又載之池北偶談、此亦何異一鶴聲飛上天耶、

當時、僧侶の如き名に遠ざかるべきものにして、已に此の如きもの有り、先進諸子の之に累せらるもの少なからざりしを知るべし。
(四) 回顧すれば、明治十五年以來、詩教大に盛んに、雜誌紛出、所謂少年才子、蔚然として興り、其際名を得るに急なる、他人の詩を抄録して我詩と爲す者有り、同一詩にして作者の二人有り三人有る者ありて、孰れか其真なるやを知るに苦ましめたるものありといふ、爾來一進一退、詩道の發達して今日に至れるや、復た此の如き輕薄漢なきを期せり、圖らざりき之を廿五年五卅一日の毎日新聞に見んとは。
同日滄海拾珠に載する所の詩五、其署名を同くす、曰く、

雜興 車二

晴雨元難定。
世穩英雄懶。

入春春尙寒。
心閑宇宙寬。

風聲喧竹塢。
詩成先一醉。

日氣淡松巒。
旋把素琴彈。

漸近清明節。
春水涵空遠。

雨餘天氣和。
晴山隔浦多。

酒旗花外閃。
歸人爭晚渡。

帆影樹間過。
斜日在平坡。

田園即事

簾衣無影午風輕。
隔花黃鳥兩三聲。

愛看池塘芳草生。

盡日幽人無一事。

春曉絕句

天末一痕落落斜。
只覺餘香溢齒牙。

山妻晨起且煎茶。

清溪嗽去梅花水。

雨中海棠

纖纖曉雨細於絲。
水晶簾內醉揚妃。

春入臙脂別樣肥。

一咲嫣然何所似。

付するに槐南先生の評語を以てす、一讀の際、輕輕看過して意を止めず、大江敬香君偶々來り告げて曰く、日氣澹松巒の詩は、飯塚西

湖君の作る所、載せて新文詩に在りど、則ち檢して九十一集に至れば、春初即事と題して此詩有るを見る、只晴雨の二字陰霽に作るの差有のみ、之が爲に愕然、更に精細に新紙を閲す、春曉絶句の後半、記する所有るもの、如し、之を平田耕石君に問ふ、君曰く、然り、予も亦嘗て此詩を見る、思ふに詩文詳解時代の詩あらん、既にして更にいふ、恐くは福井學圃君の詩に非るなきか、而して隔花黃鳥兩三聲の句も、亦嘗て見る所有るが如くにして、其作者を記せずと、或は曰く、雨中海棠の詩も亦然りと、余更に査して、
遠○笛○聲○殘○落○月○斜○
山○人○曉○起○寂○無○譁○
清○溪○嗽○去○梅○花○水○
只○覺○清○香○透○齒○牙○
の詩を得たり、實に學圃君の曉起なり、而して之を搜索するの次、又學圃君の春望の五律を得たり、其詩全く漸近清明節の詩と一字を異にせず、奇なる哉、奇なる哉。

嗚呼前後只五首のみ、一首は全然相同じく、一首は二字を異にし、一首は轉結を同じして一字を異にす、其異にする所の者は、槐南先生の加筆せる者に非ざるやを疑ふも、理無きに有らざるべし、而して其餘の二首も、恠しむべきの跡有りど傳ふ、署名者の心は果して何如。
署名者の心は果して何如、虚名を得んと爲すに急なるより、實力を養ふに暇あらずして、此窮策を施したるに過ぎざらしめば、余は其愚を憐む、此の如きの事、署名者獨り自から其詩を傷くるに止まらずして、評者を傷つけ編者を傷つく、其贏ち得る所は作者の冷笑に過ぎざるのみ、余實に其愚を憐む。
署名者は他人の詩を假りて、評者を欺くべしとし、編者を欺くべしとし、併せて讀者を欺くべしとし、而して自つから欺く、作者争でか欺き得ん、讀者争でか欺き得ん、目有る者は之を見、心有る者は

之を知る、一時の虚名を博せんと欲して、評竊の名を得ば、從來の
聲名を併せて溝壑に遺棄せんとするもののみ、思はざるの甚しきに
非ずや。

余は署名者と交誼有る者にあらざれども、全く其人物を知らざるに
も非らず、余が見受る所を以てすれば、尙俊秀の少年なるが如し、
余は其人の爲に謀るに、若し果して眞面目に作らんと欲せば、此の
如き窮策に出でざるも、其道有るとを告げん、他無し、拙くとも自
から作れ、鈍くとも自から考へよ、而して才と學は、年と共に加は
りて、他日に至りては、今其詩を借りたるの作者に駕して上るの日
有ることを期せよ、一時の名を求めて、一生の名を傷つくることな
かれ、省みよ、省みよ。
余頃る城南評論三號に書して曰く、句を竊む者有り、詩を竊む者有
り、古人を假る者有り、今人を假る者有り、恬然として愧ざる者、

世當さに其人に乏からざるべし、(中畧)願ふに我輩眼界太はだ窄し、
古人の詩を記憶し得たらん者、實は滄海の一粟に過ず、况んや今人
の詩をや、其漁洋の轍を覆ざる者、(愛公殘雪句を作りたることを指
す)それ幾何か有ると而して墨痕未だ乾かざるに、忽ち此事有るに

會す、轉た余が言の實際に合せるを悲しむ。
嗚呼、偷勢偷意、尙ほ且つ假借せざる浩然をして今日を見せしめば、果
て何如、偷語するの外、更に偷句偷詩の二を加ふ、知ず浩然何の語
を以て之を品せんとするぞ、此の如にして底止する所なからんか、
風趣韵致を以て品格を維持すべきの詩人は、俗人の俗なるよりも甚
しきの敗徳に陥らざれば已まざらんとす、今や、白日公然、他人の
才思を刼掠するもの有るを悲しむの餘、不文を顧みずして嘔吐する
もの、此の如し、噫、われ豈に辨を好まんや。

(明治二十五年六月稿)

少年詩話附錄終

明治三十年一月十五日印刷
明治三十年一月廿八日發行

少年詩話
定價金拾錢



編輯者
發行兼者

大橋新太郎
東京日本橋區本町三丁目八番地

印刷者

多田榮次
東京神田區小川町一番地

印刷所

愛善社
東京神田區小川町一番地

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

少年叢書

每月(三)發行
 正價 ●一册金拾錢
 ●六册前金五
 拾七錢 ●十二册前金二圓
 八錢 ●二十四册前金四圓
 十錢 ●郵税一册四錢

天真爛漫 進取是れ方むるものは、少年の特性なり。勇往直前、敏捷に、勇往直前、未來の大臣より出で、未來の大富豪。も此中より生ず。此等大有爲の少年を鼓吹し、少年の良友たるべき珍書は、叢書現はる。人物傳、冒險談、作文、學問、徳性を涵養する爲めに、皆此中に在り。

- 第壹編 英武蒙求 依田學海著
- 第貳編 少年詩話 野口寧齋著
- 第參編 科學雜記 西理學士著
- 第四編 臺灣探檢 中島竹窩著
- 第五編 加臺藤清 小倉秀貫著

蒼海副島種臣伯題辭 鳳洲土屋弘君序文
 天放秋月新太郎君序文 槐南森大來君題詩

柳井綱齋君著

作詩自在

全壹冊大判
 密書入美本
 正價二拾錢
 郵税六拾錢

口繪 本版極彩色畫 寫真銅版畫 京都通天橋の紅葉 ●全嵐山 ●銀閣寺 ●紀州熊野 ●徐福墓 ●玄飛墓 ●白公堤 ●漢口伯牙臺 ●武昌城黃鶴樓

以て懷を遣り、思を抒ふべし。以て憂を消し、悶を破るべし。以て風月を吟ずべし。以て時事を諷すべし。詩の用たる豈廣からずや。本書は本欄をば「詩の學問」と「詩の作法」の尤も別して、前者に於ては、詩の定義、起源、變遷、分類等を詳叙し、且つ歴代詩人の尤も抜いて、其の詩作の一斑を示す。後者に於ては、近跡古牀の平仄式及作法をば項を分ちて詳説し、古人の作例は最も豊富なり。其他作詩纂話、詩韻一斑、詩格一斑等の目を設けて、詩に關する一切の事項を網羅す。贅頭には日本詩史、詩牌、白香山評論等あり。

批評

●早稻田文學評 本書は詩の學問、詩の作法の二科に大別し、詩の理論、歴史を前者に収め、詩話、詩韻、聲韻法など後者に説けり。贅頭には、日本詩史、白樂天論、雜俎の外、山本北山の「作詩志趣」、祇園南海の「詩法」など野口寧齋の「詩牌」等を掲ぐ、從來の「幼學便覽」類の書に比して完備せるは勿論の事にして、初學者には至極便益あるべし。●讀賣新聞評 分ちて詩學及び作法の二篇とし、詩學には定義起源、變遷、流派、分類、歴代詩人等の題目あり。●高尙に失せず、難澁に流れず、俗語を以て賦比興を解く處など、所謂頤を解くの手段なり。作法は諸依に涉りて、粗畧なく、贅頭には詩史詩話等に關する趣味深き題目を設けたり。昔し徂徠圓機活法の重寶なるを愛で、呼んで小僧と稱し、常に小僧を持來れと云へり。此書の重寶なる恐らくは小僧に止まらざるべきか。

從四位秋月種樹先生序文
石川鴻齋先生著

詩法詳論

全二冊唐裝 正價金四十錢 郵稅六錢

詩に諸体あり此編は五七絶句より律長篇、樂府歌行及正題の十體等に分ち、字義語解を詳かにし、盡く病癖を去て完全無缺の妙吟を發せしめんことを、詩に志す者斯論を去通熟せば、師に就かすして古人の奧秘を深り、言はんを欲する所自ら章を爲すべし。

紀山松本正純君著

作詩訣

全一冊洋裝 正價金拾二錢 郵稅四錢

方今詩文の流行する、豈作詩の良書勿る可んや、紀山先生文壇の老將を以て此編を著し、諸體諸格諸法諸則網羅遺す莫く親切に説明す、加ふるに先生清人韓人とも多く相交る故に、新説頗る多し、音に文學に裨補あるのみならず學者一閱容易に作詩の秘訣を得ん

津田甚三郎君編

作詩秘要

全壹冊唐裝 正價金八錢 郵稅二錢

詩は志を言ふのみ、されども之の作法に通せざれば志ありとも之を言に載すること能はず、猶啞者の意ありて聲を發する能はざるが如し、此に於て詩の作法を教ふるの書古來世に重んぜらる、而して本書の如きは簡にして明、眞に必要の名に負かすさいふべし。

植村盧洲先生校閱 沖冠嶺先生編

新撰詩語活用

全參冊唐裝 正價金廿五錢 郵稅四錢

詩には詩の語あり、その活用を知らざれば以て活詩を作る能はず、本書は詩語を類集して、平仄韻脚和解を附し且一々作例をも示したる詩家心讀の良書なり。

大槻東陽先生編

詩文良材

全二冊唐裝 正價金卅五錢 郵稅四錢

詩を賦し文を作るに多く貯へざる可らざるものは、材料即成語なり、此書は天文地理時令人倫等の十八類に分ちて、許多の成語を集め、これに簡明なる解義を附したる學者必須の好書なり。

詩佛先生校閱 孫坡先生著

梧桐詩話

全壹冊唐裝 正價金拾錢 郵稅二錢

林蕪坡先生は儒學に深く律詩に精し、唐宋元明清の詩を論し字句の用法例格を示し奇字典故を擧げて此書を著す一代の詩宗大雅詩佛老之を評して、學問の傳、考證の精、近世詩話の比に非す云ふ、以て此書の眞價を知るべし。

川田甕江先生題詞 佐田白茅先生編纂

諸家枕上一覽

全壹冊唐裝 正價金拾錢 郵稅二錢

清朝諸大家尤も奇逸卓拔なる小編を輯め、これに我邦諸大家の品評を附せしものにして風味極すべし文家枕上一本を缺くべからざる奇書なり。

近衛忠熙公題詠、清國黎庶昌、矢土錦山兩先生序、横田香苗、佐成源、兒島光亨三君合編

岡本雷笑餘聲

全壹冊洋裝 正價金拾錢 郵稅四錢

壬辰七月迅雷岡本黃石先生の宅に震ふ、江湖の文人雅客詩を賦し、歌を贈りて其恙なきを祝し忽ち文壇の一佳話を成す、其詩歌を輯録したるもの「雷笑餘聲」なり、辛卯十月同志贈正四位梁川星巖先生の靈を祭り、獻するに詩文を以てす、之を輯録して「祭星餘光」と云ふ。朝鮮詩家多し其の佳什を輯めたる者を「鷄林詩選」とす皆又士必讀の書なり。

岡本黃石翁題詩 朴泳孝氏題辭
柏軒 松井 廣吉 先生編

和漢名家詩集

全壹冊洋裝 正價金廿錢 郵稅二錢五厘
傑士の高義、美人の熱淚、直に發泄して詩歌を爲る、詩歌は文學上尤も趣味あるもの也、就中字句の雄麗なる、思想の宏大なる音調の勇壯なるものに至ては實に漢を推さざるを得ず、此書は和漢歷代の詩集を渉獵して華を抜き英を選び部門を分ちて之を編次せるものにして本朝古今の名詩は固より、唐詩の雄美、宋詩の清逸、元詩の宕兀、明詩の功麗、清詩の婉緻、其醇なるものは皆一編の中に繁爛たり、目下之を誦せば志士は奮ひ美人は泣かん、劍書琴酒、坐右此の一本あらは又紛々たる幾多の詩集を要せず。

皇朝千家絕句

全壹冊洋裝 正價金拾錢 郵稅四錢
我國古今の詩名家の中に付き、一千名を撰び、一人七言四句一首を録す、雄美なるもの、清逸なるもの、宕兀なるもの、麗麗なるもの、醇緻なるもの、異光燦爛、千首千態の妙趣あり。

勝安芳伯、向山黃村先生題辭
清人黎庶昌先生序文 井上陳政先生編

曲園自述詩

全壹冊和裝 正價金廿五錢 郵稅二錢
支那十八箇中第一等の碩學老儒と聞はたる曲園先生愈越氏が自家の情況を述べられたる詩なり、蒼老簡古、雄渾雅健、以て當代無双の文雄が襟懷を看るべく、温籍着實、以てその人の境遇を看べきのみならず、併せて清國の國風を感るべき、亦以て清國の風調を察するに足るべきも、此書を措て他に求むべからざるなり。

小野湖山先生評 織田鷹洲先生著

厚生利用集

全壹冊和裝 正價金六錢 郵稅四錢
鷹洲織田完之先生の詩集なり、詩集題して厚生利用といふ、以て尋常花提月品紫評紅の吟にあらざることを知るべし、先生耕藝に明にして文學に精しき已に世人の知る所なり、然れども此書がこれを證するの的確明白なるに如くべからず、且以て眞詩を學ぶの規範に供すべし。

巖谷一六先生題辭
佐藤六石先生撰

日本名家詩選

全壹冊洋裝 正價金廿錢 郵稅二錢五厘
元和以降、漢武修文作家の輩出せる、日本文學の壯觀なす、編者博引弘搜、其名家の中につぎ、殊に二百三十人を選び、其詩凡そ一千〇五十一、五言七言累々積み來りて、異光燦發、日月を其炳を争ふもの、河海を其巨來るもの、風雲雪霆の轟々たるもの、猛虎龍驤の豪宕なるもの、清麗麗麗なるもの、壯快雄精なるもの、篇々織りて千丈の錦をなすものは、日本名家詩選なり。

學生名家詩纂

全壹冊洋裝 正價金十二錢 郵稅四錢
長詩短句の精を撰び華を抜く大凡四百五十首、猛虎寒月に嘯く如きもの、嬌鶯春林に語ふ如きもの、婦婦泣き鬼神哭し、高士笑ひ、百華舞ふ如きもの、節々相接す瑣瑣誦し來らば、意氣軒昂八宏を吐吞し、神幽意暢天地に冥合するの感を爲さん、有爲の好少年は以て其氣節砥勵すべし、卑歌俗調に耽るものには以て其腐腸を一洗すべし。

向山黃村先生、栗本鋤雲先生題詩
觀風吟社編輯

海外觀風詩集

全壹冊洋裝 正價金拾二錢 郵稅四錢
世界の奇勝、好尚、風俗、多く寫眞圖畫及書籍に由て傳へらる、之を詩人一唱の咏に寓して所謂有聲の畫と爲し、清逸風雅の詩に題せるは無し、其の之あるは實に此書を以て始とす、詩は皆當代の名家達士が作にして、景情感懷併せ備へ、花香月清の時之を誦すれば、神氣融融然として身自から異境に徜徉するの感あるべし、斯道の好書、雅人の玩賞、之に超ゆるものある可らず。

綱齋 柳井錄太郎先生編

征清詩集

全壹冊洋裝 正價金拾錢 郵稅四錢
國民の精神發して詩賦なる、其詩を誦すれば其國民の元氣如何を觀る可し、本篇は征清以來朝野諸名家の詩賦諸禮六百餘音を網羅したるもの、敵愾の發する處、感慨淋漓、人をして覺せず、舞を抜き起舞せしむべきものあり、愛國の士必ず此書を座右に備へざるべからず。

小野湖山先生関 故成島柳北先生著

柳北詩鈔

全一冊洋装 正價金拾錢 郵税四錢

明治の大文豪柳北先生、其幽懷を舒ぶ、酒に隠れ、文字に隠れ、詩に隠れて、其幽懷を舒ぶ、而して詩は是れ先生の一代の叙情的傳記、巧みに錦心繡腸の文字を弄して、無限の感懐を洩らす、流水灘に咽もて、鏘然聲あるもの、大珠小珠宛轉として、盤上に落つるもの、歴史情事、交遊、清器收めて此一冊子にあり、吟調遠く唐宋の境に蟠り、餘音引いて六朝の金粉に接す、これ一編の詩鈔にあらずし、實に明治文豪の大述懐史なり。

鶴見東馬 伊藤賢、淺井幽清三君編

古今春風詩鈔

全二冊和装 正價金五錢 郵税二錢

春風駘蕩、櫻花爛漫、美人言士の唱和此時に於て成る、芍薬の贈、紅葉の媒、才子佳人の應酬此際に在るなるへ成し、古今大家の風儀を詠するの什を集めて、春風詩鈔は成り、才子必讀の奇書、又文家必讀の玩珍といふべし。

小野湖山先生題詞 内山幻堂先生編纂

明治英傑詩纂

全壹冊洋装 正價金拾錢 郵税四錢

明治維新の革命に際し、粉骨飛身以て復古の恢業を建て、英名を内外に掲げたる英傑の功勳は、社會萬衆の推尊する所にして、其製作に於ける詩句吟咏等は、人又愛好する所なり、編者課業餘暇、常に英傑諸氏の詩文を集めて、一書を成す、其掲載の詩句凡三千首、金聲玉振紙上に躍如たり、一袖珍の小冊無量無盡の清趣あり、海内斯道の志士、乞ふ一巻を求めて、英雄家傑の性行閑雅の幽境あるを見るべし。

南梁 小宮山綏介先生講述

唐詩選二體詩講義

全壹冊洋装 正價金廿五錢 郵税八錢

李于鱗の唐詩選は古來我が邦に行はれたる詩集中の尤も廣く且久しきものなり、即その我が邦の詩社會を益せしき李氏の書に譲らざるべし、周編の二體詩、その傳播の廣き李氏の書に譲らざるべし、而してその選の精に至ては或は優るあるも劣らざるの評あり、今二書を併せてこれ或は解釋をなす、其の詩學に益あるや論を待たざるべし、或は此の編以て唐宋二代の詩醇を盡せりといふも可なり。

